

おもてなし

作 わかぎさるふ

大正12年。日本橋、黒門町の東。

黒塀に見越しの松が庭から見える、少々粋な感じの小さな一軒家。

三味線の師匠でも住んでいるのかと思わせるような佇まいであるが、

住んでいるのは40代の芳崎兼（よしざきかね）という女性と、東京の大学を卒業したばかりの息子。清（きよし）である。

実は船場の材木問屋、岩井庄之助の妾の家であるが、旦那はとうに亡くなつていて、未亡人というような立場。

これといつて商売をしている様子ではないが、毎月の手当でも本家から丁稚が届けて来ているし、不思議に人の出入りがあり、近所では船場の

御大家のお手賭けさんであったから、それなりの付き合いも多いのだろうと、華やかな大家の人脈を見守っているのだった。

しかし、実際には出入りの人々には理由があったのである。
 女主、芳崎兼に会うための理由が。

家の奥から立派な身なりの中年男性が兼と一緒に出てくる。

対の大島紬に質素ながら、ひとめで上等と分かる角帯を締めているところを見ると、明らかに船場の商人のようである。

兼 ほんまに今日は、おおきにでした。

篠山 いや、こつちこそ。おおきにやつたなあ。

兼 やっぱり、あんたに相談するのが一番早いわ。

篠山 私なんかがお役立てるもんかどうか。

兼 いや、もうこの献立で十分や。ほんまに助かった。なんせ物入りや

篠山 さかいなあ。対面も大事やが、節約もせんと。

兼 ほんまに。なんでもお金かけたらええちゅうもんとちやいます

よつてになあ。

篠山 娘も3人目やと物入りやわ、手は抜かれへんわ、えらいこつちやで。

兼 頼りにしてまつせ、お兼はん。

篠山 へえ、できる限り気張らせてもらいますんで。

兼 これで料理だけでもちよつと安うなるか思うたら、ホツとしたわ。

篠山 見た目は変わらしませんで。

兼 それそれ、そやから頼むんやがな。見た目は変わらんどころか、

篠山 派手にしてもらてええさかいな。正味の話（手で示して）これだけ

浮かせたいんや。

兼 へえ。分かりました。奈良の方からええ野菜仕入れますよつてに。

篠山 仕出屋さんとも話ししまつさかいに。一回、お料理がどんなもんか

作りますよつてに、食べに来ておくれやす。

篠山 助かるわあ。あんた1人居たらほんまに便利やなあ。

兼 おおきに。

篠山 ん？

兼 あては…便利、言われるんが一番の褒め言葉ですよって。

兼 ははは。相変わらず変わった女子やな。

兼 そうでつか？

篠山 まあ、なんせ頼んまつさ。うちは男の子が居らんさかいに、ほんまに苦勞するで。それに比べたら、岩井さんはほんまによう出来た商人やったなあ。本家にひとり、ここにもひとり。ちやあんと男の子ひとりずつ仕込んだある。

兼 はあ、肖りたい肖りたい。

兼 もう遅うおまつしやろ。

兼 きついなあ。

兼 いや、すんまへん。

篠山 嘘や、嘘や。ほんまにもう娘三人に骨の髄まで吸い取れて、

兼 そろそろ干からびるわ。

兼 ああ、そう言うたら、清ぼん、帰ってきてるんやて？

兼 清ぼんやなんて、清で結構だす。ぼん付けてもらうほどの子やおませんの。

篠山 何言うてるねんな。本家のきーぼんがあん調子やねんから、

兼 清ぼんに何が回ってくるか分かるかいな。苦勞して大学まで出していて良かったな。先見の明ちゆうやっちゃ。

兼 怖いこと…

兼 あ。あはは、こら言わん約束やったかいな。

兼 今日、急やったさかいに何のお構いもしませんで。

篠山 かまへん、かまへん。ここでのおぶの一杯も出されたら、

兼 返ってビックリするさかいな。

兼 まあ。

兼 ほな、宜しゅう頼んまつさ。

兼 へえ。

兼 ほな、さいなら。

兼 おおきに。

篠山が愛想を言いながら帰って行く。兼はその姿を見送りながらしれっとした顔つきで塩を撒く。

奥から息子の清が出てくる。

清 山城屋さん、やっと帰りはったな。

兼 これ。

清 長いこと居ったなあオッサン。我がの娘の結婚ともなったら、流石にしつこいもんなやな。

兼 止めなさい。男の口うるさい人は嫌われまっせ。
清 ほんまのことっちゃ。
兼 ほんまのことは言わんこっちゃ。
清 >い>い。
兼 清。
清 お母ちゃん、お腹空いた。
兼 いや、この子言ったり。怒られてる最中に。もうほんまに肝の太い。
清 お茶漬けでええさかいに。
兼 お茶漬けやったら自分でしなはれ。
清 (甘えた口調で) なあ。
兼 あほらし。

台所に行ってしまう兼。嬉しそうに後を付いていく清。

清 そんなん言うて用意してくれるんやろ？なあ…お母ちゃん。
兼 お母ちゃんって。
兼 あんたに、お香々切らせたら分が厚くなるよってに
清 したげるだけでっせ。
兼 また始末が始まった。
兼 始末、コケにしたらあきまへん。

清も台所へ。

二人の会話が台所の方から聞こえてくる。

影がチラチラと障子に写り、親子の影が仲良さそうに重なっている。

雨の音が聞こえてくる。静かな夜の雨である。

第一場

どんよりと曇った昼下がり。

女が一人、キョロキョロと芳崎家を覗きながら、周りを気にしている。

30代であろうか、若くはないがまだまだ女盛りの色香が着物の趣味にも見てとれる。

小さな紙を見ているところを見ると、この辺りに来るのは初めてのようである。

百花　　ここでええんやろか。

家の中を覗きながら地図を確かめる百花。

百花　　お邪魔しますう…

誰も居ないようで、返事がない。

百花　　すみませーん。誰ぞ居はりますかあ？

（ため息）どっか行つてはるんかいな。あーあ…しゃあないな、

ここで待たしてもらお。

ひとり座り込む百花。タバコを吸おうとして火を付けようとした時、庭先から男が入ってくる。お互いに見知らぬ様子。

百花　　あ…

藤原　　あ…

百花　　（タバコを仕舞いながら）こんにちわ。すみまへん、勝手に。

藤原　　あ、いや。

百花　　あて、駿河屋の旦那さんにお聞きして来ましたんです。

藤原　　いやいや、あの、僕はここの者じゃありませんので。

百花　　あ…お客さんでつか？

藤原　　あなたも？

百花　　お客いうような者とちやいます。この家の人にお問い合わせ…

藤原　　僕もです。

百花　　へえ、そうでつか。

会話が切れてしまい、二人とも手持ち無沙汰。

二人　　あの…

百花　　すみまへん。

藤原　　いや、こつちこそ。

百原 東京から、わざわざ始末の相談事ですか？
藤原 はい？

百原 いや、こんなこと聞いて、すんまへん。あてもここに初めて来たもんで。半信半疑なもんで。

藤原 はあ、僕も紹介してもらって来たんですけど……ここ芳崎さんのお宅ですよわ？

百原 そつやと思います。芳崎兼さんの。

藤原 あんさんは、どないなご用で来はったんです？

百原 はあ。ちよつと仕事のことです……

藤原 ああ、すんまへん。言いくいんですか。堪忍だつせ。

百原 そやけど、大概のことに相談に乗ってくれるちゆう話でつせ。変わった商売やこと。

藤原 あなたは、何でここに？

百原 あて、ご縁があつて、駿河屋はんのお世話になるんです。そやけど、

ご大家やさかい、妾になるのにも仕来りがある言われて、

習いに来たんです。これから毎月お手当て頂くんやさかい、

お家はんにはきちんご挨拶に行かんとあかんて。

船場で大層なごだんなあ。

藤原 あ……ははは。はつきりものを言う人だなあ。

百原 堪忍。そうですわん。それがええとこ。

藤原 いや、失礼しました。そう言われたら隠してるこつちが

バカみたいだ。

百原 気にせんといっておくれやす。あての性格やさかいに。

藤原 いいえ、失礼しました。僕は藤原京太郎という、伏見町で用品屋

やつてる者です。

百原 へえ？東京のお方やおませんの？

藤原 東京です。こつちの友達と共同経営し始めたところなんですよ。

百原 あ、駿河屋さんって、足袋問屋の駿河屋さんでしょう？

藤原 この間、寄り合いでお名刺を頂いたところですよ。

百原 そつでつか。

藤原 僕らの店は小さいとこですけど、今度は非来て下さい。

百原 婦人物専門に扱ってますから。

藤原 へえ、女物の洋服でつか？

百原 きつとお似合いになりますよ。

藤原 いやあ、恥ずかしい。あんな手も足も丸出しの着物なんか、

百原 よう着ませんわ。

藤原 丸出しじゃないものもありますよ。それにうちは洋服だけじゃなく

細かい物もあります。お気に召すものがあるかもしれせんよ。

百原 東京で買い付けた櫛や、帯留も置いてますんで。

藤原 東京から？ほんまでつか。欲しいのんがおますわん。

藤原

へえ？

百花

飛行機の帯留、ありまへんか？

藤原

飛行機？

百花

へえ、日本がこの前の戦争で勝ちましたやろ。あの頃に一回東京へ行ったんです。そしたら銀座で飛行機の柄の銘仙の着物着てる

お方がおましてなあ。いやあ、東京って大胆な洒落者がおるんやなあって感心しましたわ。まあ着物はよう着んけど、帯留くらは洒落たあるなあと思うてあれからずっと探してるです。

藤原

なるほどなあ。勉強になりました。関西の女の人は、花や蝶みたいな綺麗なものばかり好きなのかと思つてましたが、そんな世相を反映させた物でも面白がるんですね。

百花

いや、そない感心されたら照れるわ。

藤原

けど、飛行機の帯留に、どんな着物を合わせるんです？

百花

そんなとこまで考えてませんけど…そら雲の柄の着物とか着たら映えるんちやいますやろか。

藤原

ああ、なるほど。遊び心満載ですね。それを着て六甲の方に

百花

行かれたらいいんじゃないですか。空に近いとこに出かけるのが

藤原

洒落てますよ。

百花

ほんまやあ。

藤原

ははは…

そこに兼が戻ってくる。賑やかに笑つてる二人を見て不思議そう。

兼

お越し…

百花

あ、すんまへん。

藤原

お邪魔します。あの、芳崎さんでしょうか？

兼

へえ、そうです。

藤原

どうも…伏見町で用品屋をやってます、藤原京太郎と申します。

兼

そうですか。なんぞ？

藤原

あ、はい。あの、お先にどうぞ。

百花

いや、えらいすんまへん。

兼

ご一緒やないんですか？

百花

ここで話し込んでたんです。あて、百花言いますねん。

兼

今日は、お姉さんにご教授お願いしたいことがあつて

藤原

参りましたんです。

兼

そうですか。ま、お上がりやす。藤原さんもどうぞ。

百花

すんまへん。

藤原

いやあ、僕はまた来ます。この方の相談を聞いてあげてください。

百花

あらあ、そんなん。あてが先に喋ったから…

藤原 いいえ、そんなんじゃありません。今日は場所を確認しにきただけだったの、ほんとにお先にどうぞ。

兼 何のお構いもしませんで。

藤原 今日みたいな時間に来たらよろしいですか？

兼 へえ、お待ちしています。

藤原 失礼します。じゃあ(百花にも会釈する)

百花 おおきに。まだどこぞで。

藤原が帰って行く。残された百花は改めて座りなおす。

兼 ほんで相談って…なんででしょうか？

そこに、清が戻ってくる。黒いめがねを掛けている青年が一緒である。

清 お母ちゃん、そこできーぼんに会ったで。僕が帰って来てるって聞いて、うちに来てくれるとこやったんやて。

喜一 お邪魔します。

兼 いや、お越しやす。

清 あ、堪忍。お客さんか。きーぼん、二階行きましよか。

喜一 お客さんやったら、また来るわ。

清 かまへんって、こっちやで。

さりげなく喜一の手を取る清。目が悪いようである。

喜一 ネエちゃん。堪忍やで。

兼 何言うてはりますのん、ようお越し。

喜一 清ぼんに読んでもらいたい本があるさかいに持ってきたんや。

兼 きーぼんまで、この子のことぼんぼん扱いして。あきまへんや。

喜一 ええやないか。

兼 あきまへん。清ちゃんて宜しいから。

清 きーぼん、ごはん食べて行くやろ？

喜一 そんなんええよ。

清 食べて行ってえな。きーぼんが一緒やったらおかずが増える

さかいな。

喜一 なんや、僕は釣りの餌かいな。

清 せっかくの海老で釣っても、鯛は出てけえへんけどな。

喜一 ははは…

仲良きそろうに奥の部屋に行ってしまう二人。

その間、待たされていたわりには、大人しくしている百花。

兼が気をつかう。

兼 堪忍でんな。ほんで何でしたやろ？

百花 今のぼんぼん。岩井商店の？

兼 へえ、そうだとす。

百花 やつぱり、へえそうでつか。

兼 なんて知ってはるんです？

百花 岩井の旦那さんの一周忌のお座敷に出てましてん。ほらお目が、悪いんでっしやろ？お手水にご案内したことがあるんです。

兼 そうでつか。そらお世話になりました。

百花 はあ？

兼 あてが、その岩井の旦那さんのお世話になってましたんでなあ。

百花 ああ、そうでつか。それで仕来りはここで習えって言わはったんや。

兼 あんさん、誰そのお世話になりますんか？

百花 へえ、駿河屋の旦那さんに言われて来ましてん。

兼 駿河屋はん？またでつか？

百花 なんや、歴代ここで教わってるんかいな。

兼 それやったら、ご挨拶の時はよっぽど大人しいしとかんと

百花 あきませんで。

兼 うちが、こんなんやからでっしやろ？

兼 え？

百花 分かってまつせ。ちよかで喋りなんは子供時分からすねん。

兼 旦那さんも、自分が世話する女の中にひとりくらい元気なんが

兼 居ってもええかいなちゆうてましたわ。

兼 あはは…そら、よう分かってはるんこと。

百花 へえ。自分のことのでっさかいに。

兼 叶んなあ。ご挨拶の仕来りやったら書いたもんがあるよつて、

兼 それ売ったげます。

兼 ？

兼 なんです？

兼 妾になるための仕来り、書いて売ってるんでつか？

兼 いちいち教えるより簡単でっしやろ？百円だとす。

兼 弾けるように笑う百花。

兼 百花 おもろいわあ。妾のお作法教えて食へてはるお師匠はん、

兼 初めて会ったわ。

兼 こんなもんで、おまんま頂けません。ほんでもまあ。

兼 年中、お手掛けさんになる女子が尋ねて来るくらい、船場も勢いように繁盛してほしいもんやけど。

兼 百花 お姉さん。太いお方やなあ。
お金はんさんが払いますんか？それとも、駿河屋の旦那さんに後で頂いたらええんでつか？

兼 百花 あてが払います。自分に投資するんは自分だけやさかいに。ええ気根性だすな。まあしつかりお気張りやす。

兼 百花 おおきに。

兼 百花 長いこと居ってやったのに、お構いもせんとすんまへんなあ。

兼 百花 出す気おまへんのやろ？

兼 百花 え？

兼 百花 世間で言われへんような頼み事しにくる者は、客やあらへん。

兼 百花 そやからお茶なんか出すんもつたいたい。ちやいまつか？

兼 百花 あんた…

兼 百花 あて、アホちゃいますねん。

兼 百花 ふふふ。それやったらなあおさら氣いつけてお気張りやす。

兼 百花 駿河屋のお家さんは賢い女子はお嫌いやさかいな。

兼 百花 え？

兼 百花 アホのふりは知恵要りまつせ。

兼 百花 …おおきに。お邪魔さんでした。

兼 百花 いつでもお越し。あてで役に立つことがあつたら、相談に乗りまつせ。

兼 百花 はばかりさん。

兼 百花 百花はちよつと兼に氣後れしたように帰って行く。

兼 百花 それを奥の廊下で聞いていた様子の子の喜一が声をかける。

兼 喜一 ネエちゃんにしたら、えらい構うたげてたな。

兼 喜一 いや、きーぼん。聞いてはったんですか？

兼 喜一 立ち聞きして堪忍。喉が渴いてな下りてきてんけど、

兼 喜一 どこに何があるか分れへんし、茶碗でも割つたら悪いと思つて。

兼 喜一 そんなこと、清にやらせたらええのに。

兼 喜一 僕が自分で行けるちゆうたんや。勝手知つたる台所やさかいって。

兼 喜一 そやけど今日みたいに天氣が悪かつたら、もう細かいもんが

兼 喜一 分かれへんようになってきた。

兼 喜一 きーぼん…

兼 喜一 いやいよ開き盲や。

兼 喜一 そんなこと！

兼 喜一 しゃーないわ。何年も前から分かつてたこつちや。清ぼんが帰って

兼 喜一 来てくれて助かるわ。家の者、誰も僕の読みたい本なんか読んで

兼 喜一 くれへんし。これから頼りにせんと。

兼 喜一 それくらい、いつでもさせまつせ。

喜一
ネエちゃん。清ぼんを店に入れて欲しいって…いざれお願いする
ことになる…

兼
言うたらあきまへん。

喜一
ほんまのことや。

兼
ほんまのことは言わんことです。お医者はんかて、まだまだ望みは
あるちゆうてはるやから。そんなこと言うたらあかんのです。

喜一
言うたらほんまになるさかいに。

兼
ええがな。弟やねんから。それにネエちゃんの子やし、

喜一
僕より商売上手いやろ。

兼
アホなこと。

喜一
あの子は頭がええ上に優しい。ええ旦那になるで。

兼
何を言いますんや。清には一生、きーぼんのお役に立つように

喜一
言うてきかせてありまっさかい、安心しておくれやす。

兼
そら心強いなあ。

喜一
当たり前だす。お世話になつてるんやさかい。

兼
そんなんやのうて、ほんまに可愛いねん。

喜一
え？

兼
誰も居らん家で、だんだん目が見えへんようになるのん待ってる

喜一
だけの生活やさかい、清ぼんと喋つてたら、ええ気分転換になる。

兼
大学生活の話も面白いしなあ。

喜一
それやったら宜しいけど。

兼
さつきも僕が居つたらおかすが増えるちゆうて、軽口言うて

喜一
氣い遣わさんように言うてくれてた。ほんまは二人分を3つに分け

兼
ただけで、何もおかすが増えることもないんやろけど。

喜一
そんなこと、あらしませんで。きーぼんには、ちゃんとお魚も

兼
買うて来まっさかい。

喜一
あかんあかん、清ぼんは月に2回しか食べられへんのに、

兼
僕にだけ出したら可哀相や。

喜一
なんでそんなこと？

兼
清ぼんが、うちは未だに本家の丁稚と同じ献立やちゆうて

喜一
さつき、しごつとつたさかいにな。

兼
もうあの子、恥ずかしいこと言うて。

喜一
怒らんといたげや、育ち盛りやねんから毎日、香々やおくもで

兼
ばっかりやったら、そら愚痴のひとつも出るで。

喜一
そんな話までするやなんて…旦那さんが小さいうちに店に引き取る

兼
ちゆうてくれはったんを、あてが聞かんとここへ置いて育てた

喜一
さかい、せめて丁稚のすることくらい身体でおぼえさせとかと

兼
思うてしてただけだす。

喜一
厳しいなあ。

兼
お店にお使えするお稽古だす。

喜一 なあ、僕がちよくちよく来たら迷惑か？

兼 迷惑やなんて。うちは、いつでも来ても来てもうたらええんですけど。

ご本家のぼんぼんやのに。

喜一 それやったら心配あれへん。今のところうちの当主は僕やさかい。

僕が法律や。

清が降りてくる。

清 きーぼん、何してるん？

喜一 ああ、堪忍、堪忍。ネエちゃんと話込んだ。

清 なんや、階段上がられへんのかと思うて心配するがな。

喜一 大丈夫や。

兼 あ、のどが渴いてはったんやった。今、おぶ差し上げますんで。

喜一 おおきに。

さりげなく手を出す喜一、兼はそれを見て手を取る。

兼 こっちだっせ。

台所の方に手を引いていかれる喜一。清が守るように付いていく。

第二場

気持ちのいい晴天の昼下がり。

兼の家の座敷に風呂敷包みを運んでいる娘（ユキ）がせつせと

働いている。この家の女衆ではなさそうだが、前掛けに片襷を掛けて風呂敷包みを広げていく。中身は着物（喪服）である。

ユキ　ふああ、仰山なこと。

ユキは次々と着物を広げていく。どことなく愛嬌のある娘である。

ユキ　重いと思ったら帯の包みや。

衣桁（いこう）に喪服が掛けられる。

ユキ　なんや全部、喪服や。…誰ぞ亡くなりはったんかいな。

南無阿弥陀仏…南無阿弥陀仏…

初老の女性（メ）が入ってくる。

メ　口はええさかい、手動かしなはれや。

ユキ　あ、お師匠はん。

メ　誰がお師匠はんや。

ユキ　そうかて、みなさんそう呼んではりまっせ。

メ　ほんまに、ええ迷惑やで。これ、手！

ユキ　すんまへん。（お辞儀する）

メ　ほら、それや。

ユキ　へえ？

メ　ああ、もう。ドン臭い！謝ってから動くんやったら、謝らんでええ。なんでも2つのこと一辺にしなければ。謝りながら着物広げるんや。

ユキ　そんな器用なこと…

メ　もう、そんなこと言うてる間に着物一枚広げる時間あつたがな。

メ　はそう言いながら衣桁に着物を掛ける。

ユキ　あ、あんたみたいに、ひとつずつやったら一日中かかるわいな。

ユキ　あ、すんまへん。（頭を下げる）

メ　ほら、またお辞儀や。そんなことせんでええねん。もうほんまに百姓の子はなんでもかんでも頭下げるさかい邪魔臭いなあ。

謝ってるだけやったら一文の徳にもなるかいな。

早いことそっちの着物広げなはれ。

ユキ へえ。すんまへん(と言いながら立ち上がる)

へ そうや、早いこと動いて。ほれ。

ユキ へえ(着物を広げる)

へ それにしてもまあ、こない仰山の喪服。どっから集めてくるんやろ。

質屋でもこないないで。葬式の間に合わせてに借りに来る方も来る方

やけど、置いとく根性も大概のもんやなあ。

ほんまに何がお金に換わるか、分からんわ。

ユキが糸を切り始める。

へ あった、あった。それやがな。その紋が三つ柏や。今夜要る

やっちや。

ユキ 三つ柏？

へ 紋のことはまた教え上げるから、先にシツケ取ってや。

ユキ シツケって、この白い糸のことですか？

へ あんたシツケも知らんのんかいな。

口入屋もここへ修行に寄こすわけやな。そうや、それがシツケや。

新しい着物は畳崩れんように全部シツケが付いてあるねんがな。

ユキ そやけど、どれもこれも付いてまっせ。

へ そら喪服なんか、しよつちゆう着るもんとかやうさかい、

崩れんように付け直してあるねんがな。新しいのんはここまで

付けてあるやろ。直しとくだけの人はずぐに抜けるように、

袖と、襟のとこだけしとくんや。

ユキ へえ…

へ 関心してんと、覚えながら、手え動かしなはれ。

ユキ へえ(それでも嬉しそう)

ユキが糸を抜きかけたらまた叱られる。

へ これ！真ん中から糸切る子がどこに居るんや。端つこの玉のとこ

切って、なるべく長めに抜きなはれ。その糸また使うんやぞ。

ユキ へえ？

へ 当たり前やがな。絹物のシツケは絹糸でしてるんやさかいに

上等やがな。買うたら高いんやぞえ、全部綺麗に抜いて

巻いとくんや。

ユキ 全部？これ、全部でつか？陽暮れまっせ。

へ 慣れたら早くなる。ほれ、ここ切って、こつやって抜きなはれ。

慣れない手つきで一生懸命糸を抜くユキ

ユキ ええ着物って、大層でんなあ。

兼 あんたにも、そのうちええ物着たら女子が変わるちゆうことが分かるようになる。

ユキ なんておます？

兼 ええから手動かすんや。ほんでよう触つときなはれ。

ユキ これがほんまもんの羽二重や。気持ちええやろう。

兼 へえ。それはわてもさつきから思うてましてん。(嬉しそう)

ユキ (吹き出す) まあ。そやけど懲りん顔やこと。

兼 へえ？

ユキ あんたみたいな愛嬌のあるのも珍しいな。天下無敵の女衆顔やな。それ褒めてもつてます？

兼 ああ、褒めてる。ものすごい褒めてるでえ。見てすぐに女衆て分かる方がよっぽどええわ。下手に別嬪やないほうが身のためや。

ユキ そやけど、ここの御寮人さん、別嬪さんですがな。

兼 あの人は御寮人さんやあれへん。なんでもかんでも御寮人さんちゆうたらあきまへん。そんなん言うてもらえるんは船場の

ユキ お店のお内儀さんだけや。よう覚えておきなはれ。

兼 あんたこれから道修町の吉野屋さんに奉公に上がるんやろがいな。

ユキ へえ。ほなここのお姉さんのこと、なんちゆうたらええんです。

兼 お兼はんでえんや。

ユキ ああ、そうでつか。なんやお妾さんにも呼び方に仕来りが

兼 あるんかと思いましたわ。

ユキ なんでもかんでも決まってるまっしやろ、

兼 もう覚えきられへん。(膨れ面になる)

ユキ あはは。なんちゆうオモロイ顔や。得な子やなあ。

兼が竹行李を持って入ってくる。

兼 お師匠はん。三つ柏の紋のんありましたかいな？

兼 もう、あんたがそう言うさかい、みんな呼ぶようになってしてもて

兼 叶んわあ。

兼 なんて、ほんまに奉公人の細かいこと教えてるんやさかい、

兼 まんざら嘘でもおませんがな。

兼 そやし、外から見たら稽古屋みたいで見栄がよろしいで。

兼 あほらしい。女衆の下ごしらえしとるだけやがな。

兼 立派なお師匠はんですがな。ほんで、おましたか？

兼 これと…今シツケ抜いてるやっっちゃ。

兼 桁、行けまっか？

兼 (目分量で) 一尺二寸くらいあるさかい、いけるやろ。

あかんかったも葬式の間だけ手締めといたら分からへん。
どうせ居並びの泣き女やねんさかい。

兼 なんぞえ、二人とも九重はんのお手掛けさんでっせ。

兼 何人居るこっちゃや。ほんまにお手当て貰うてたんやったら、
黒紋付くらい揃えさせとくもんや。

兼 若いんでんがな。急やったさかい、作る間もなかつたんでっしやろ。

兼 ひや、いやらしいよ。二人ともかいな？

兼 へえ。九重はんも死ぬまでになんとか跡取りさんと思うて

兼 はったんちやいまつか。

兼 最後の悪あがきやな。

兼 これ。この子が聞いてますがな。

兼 (どっさに仕事をし始めて)聞いてまへん。わて何も聞いてまへんで。

兼 二人顔見合わせて大笑い。

兼 言うたら台無しや。

兼 あ。

兼 アホが一番可愛いなあ。

兼 女たちが笑っているところに、玄関の方から声が聞こえる。

兼 丁稚(声) すんまへん。九重の者だす。

兼 あ、もう取りに来はった。抜けたんか？

兼 へえ…これで最後だす。

兼 早うしなはれ。

兼 がささつと着物を畳みメが広げた風呂敷にささつと包む。

兼 あつという間に荷物が出来上がり、表に持つていく兼。

兼 呆気にとられて見ているユキ。

兼 玄関先から兼の声が聞こえてくる。

兼(声) えらいお待たせして、すんまへん。

兼 丁稚(声) おおきに。

兼 九重の丁稚がお礼を言う声が聞こえてくる。

兼 ユキ ちよつとも待たしてはりませんか？

兼 何ぶつぶつ言うてるんや。さ、他の着物二階に持つていくぞ。

兼 ユキ あ、へえ。

兼 (ここんとこ天気悪いさかい、いまのうちに虫干しせんぞ。

ユキ お師匠はん、さっきのあれ、どないやって畳みはったんです？

ものすごい早いことちやちやってしはりましたで。

メ なんや、やってみたいんかいな？(着物を一枚持って)

下から畳むんや、こうやって…

一緒にやってみるが、出来ないユキ

メ ドン臭いな。

ユキ そうかて(笑って)初めてですよって。

メ (感心する)ほんまに、得な顔やなあ。

ユキ へえ。

メ 袖畳みでええさかい、ちやつちやつ持っていくで。

ユキ 袖畳みってなんでおます？

メ いちいちやな。ええから着物放りこんで来なはれ。

さつさと持てる着物を持って、二階へ行ってしまふ。

ユキ あ、待っておくんはなはれ。

残った喪服を竹行李に入れて着いていくユキ。
と、雷の音が聞こえてくる。

メ(声) あかーん。こら虫干し出来へんなあ。

突然、閃光が広がり、大きな雷の音が聞こえる。

ユキ ひゃあ。おへそ取られまっせ。

雨の音が聞こえてくる。

第二場

雨の中を男が二人、転ぶように入ってくる。
傘を忘れたのか、ぬれた着物をぬぐっている。

島村 ふわあ、えらい通り雨やなあ。晴れてるちゅうのに。
ついてないでほんまに。

春日部 急やったなあ。長堀渡ったところから。

島村 逃えたばかりの背広が台無しやで。

春日部 ここかいな？

島村 そや。

春日部 へえ(部屋を見回して) 走ってきたから表、よう見てへん

かったけど。聞いてたほど粹な作りでもないがな。

島村 なんてえよう見てみいな。この質素なのが先代の岩井はんの
凝り方やがな。普通の座敷やけど、ええ木使うてるで。

春日部 (触ってみて) ああ、なるほど。船場の家の普請より、
大事な女子に持たした家を張り切って作らせたんやな。

島村 そら、材木問屋やさかい、上等の木い使い放題やがな。

長いこと知ってるけど、このへんの柱、全部松や。松やにが
出て丈夫やし、年々ええ色になつてきてるがな。一本なんぼくらい
するねんやろなあ。

春日部 そやけど、ここが化けるやろか？

島村 そら、そんな時のために、お兼はんが飾らんと使うてるねんがな。

春日部 へえ…ほんまに変わった請負やなあ。

島村 ま、ええから。任しとき。

そこに兼が出てくる。いつものように質素な色合いの着物を着て
目立たない感じである。

島村 ああ、お兼はん。お邪魔してまっせ。

兼 お久しぶりで。

島村 こちらな、春日部さん。佐田屋ちゅう…

兼 ああ。博労町と井池の角にある？

島村 (春日部に向かって自慢気に) これやで。

春日部 ようご存知で。光栄ですわ。

兼 最近二番の話題でつきかいに。佐田屋さんの冷たい最中いうたら、
うちのお弟子さんもみんな持つてきてくれはります。

春日部 弟子？なんやお稽古事もしてはるんですかいな、多彩やなあ。

兼 どうも。芳崎兼と申します。

春日部 うん、ええな。

兼 は？

春日部 兼(かね)ちゅう名前がええがな。金、金、金の土地によう合つた名前やなあ。下世話な話モテまっしやろ？

兼 いや…そんなこと。

島村 ははは、ビックリしてるやないか。止めとき、止めとき。

「ベーヤン。この人、こんな別嬪やけど、どこぞに出とつたんとちやうんや。」

春日部 そうでつか？なんやわしはてつきり、芸者が仲居やつたんかと。

「そうやろ？先代もお盛んやつたと思つやろ。それが全然ちやうんや。」

お兼はんは岩井の女衆やつたんや。

春日部 女衆？へえ、そら出世やがな。

あてのことはもう…すんまへん。

春日部 ああ、そうやつた。

島村 堪忍、堪忍。お兼はん、今日はちよつと、折り入つて

頼みたいことがあるんや。

へえ？

島村 あのなあ…今までこない大掛かりなこと頼んだことなかつたさかい、

出来へんかつたら、はつきりそう言うて欲しいんやけど。この、

「ベーヤンの、いや春日部さんのご依頼なんやが…」

兼 へえ、お聞きします。

春日部 おおきに…ははは。なんや面と向つて聞かれたら、

やつぱり言いにくいなあ。

ほらみてみいな。一人で行けるちゆうたくせに。

いや、雄さん、こない別嬪さんが出てくるとは思えへんかつたで。

根性のない奴つちやなあ。

春日部 面目ない。

なんでおます？

兼 いや、実はなあ…この男の、妾になつてほしいんや。

(ちよつと驚いて春日部を見る)

「ははは…さすがのお兼はんでもビックリしたやろ。」

兼 どういうお話ですか？

「ずっとやないで。一日だけでええんや。一日だけ、ベーヤンの妾のふりしてくれるだけで。」

…

兼 実はなあ…

「よろしおます。」

兼 島村

「ん？」

兼 お引き受けします。

兼 島村

「なんやしらんけど、面白そうなお仕事をさかい、お引き受けします。」

顔を見合わせる島村と春日部、少し苦笑する。

春日部 ははは…ほんまに男以上に肝据わってはるなあ。

何も聞かんでもええんかいな。

兼 お聞きます。けど先に返事した方が言いやすおますやろ。

春日部 こらこら。一本獲られたな。

兼 あ、すんまへん。何のお構いもしませんで。お話聞き込んでしまつとこでした。いまお茶入れまっさかいに。

いそいそとお茶の用意をしに行く兼。その様子を見ている二人。

島村 大丈夫や、べーやん。気に入られたで。上手いことやつて

くれるやろ。

春日部 なんで分かる？

島村 お兼はんがお茶出すんは、大きい仕事の時だけや。なんせ儉約家でしづちんで有名やさかい。これで干菓子のひとつも付いてきたら本気の証拠やで。

そやけど、あない気軽に引き受けてくれるとはなあ。

島村 な、便利な女子やろ。口も堅いで。

春日部 ほんまに岩井の女衆やったんか？

島村 ああ、元々は学校の先生かなんかの娘やったらしいけど、親が死んで、ええ歳になってから奉公に来たんや。

春日部 さすがに地の者は他所の内情まで詳しいなあ。

島村 そうでもあれへん、お兼はんが別嬪やったから評判になっただけや。

ちようど、わしらと同じくらいやさかい、正直みんな狙うてた

ちゆうやっっちゃ。

春日部 ははは。なるほど。

島村 けど、あの頃にちようど岩井のきーぼんが産まれたとこで、

ほら眼病患うてる、今の若旦那。

春日部 ああ、気の毒なこっちゃん。あの子も。

島村 御寮人さんが、あのぼん生んですぐに亡くなったもんやさかい、

お兼はんがお乳母どんの代わりに育てる役回りになつてなあ。

先代もそれもあつて見初めたんやろ。

春日部 へえ、運のある人やな。

島村 そこやがな。けつきよく、自分の息子もおるしなあ。

春日部 ほんなら、その息子が岩井を継いだらとしたら、晴れてお家さん

やないか。男には出来ん出世やなあ。

島村 そう上手いこと行くかどうかしらんけど、裏でなんでも引き受けてくれるさかいなあ。お兼はんが居らんようになったら、それはそれ

でわしらみんな困るで。

春日部

そない生活に困ってるんかいな。

島村

いいや、先代が死んでからも、岩井から変わらず、毎月女衆がお手当て持って通うてきてるはずやで。

春日部

ほんなら、悠々自適やがな。

島村

働かんとじっとしてられへん性分やろ。そこは根から女衆や。そやし息子が東京の大学に行つてるさかい、物入りなんと…

お兼がお茶を持って入ってくる。お茶が2つと、干菓子の皿が付いている。男たちは顔を見合わせにやりと笑う。

兼

お待たせしました。何もございせんけど。

春日部

(干菓子をかじりながら) ほんまや。

島村

ま、そういうこつちや。

兼

なんです？

島村

ええから、ええから。ほんでやなあ。来月この男の親御さんが里から出てきはるんやが、奈良の豪商でなあ。親父さんの言うにはせつかく船場で商売が成功しても、嫁はんも困い者も居らんようやったら格好悪い、ちゆうて、えらい劍幕らしいんや。

春日部

劍幕ちゆうほどやないんやが、田舎者やさかい、言い出したら頑固でなあ。それでついこの間来た時に「わてかて女子のひとりや二人養うてますがな」ちゆうてしもうたんや。そしたら会いたいちゆうて聞かんのやがな。

兼

春日部

そんなこと言うても、今日や明日に急にええ仲になる女子が居るわけないし、そのへんの芸者に頼むわけにもいかへんしなあ。お父さんの前で妾のふりしとつたらええんでん。

兼

ここも貸して欲しいんや。わしが買うたつた家ちゆうことにしてもろてええやろか。

二人

分かりました。そやけど、あてで宜しおますか？

兼

そらまあ…

兼

あはは。正直なこと。分かりました。ほんなら若い、大人しい

島村

別嬪さん見繕いまつさ。

兼

そんな都合のええ女居るんかいな？

島村

探したら何とかかなりますやろ。そやけど…

兼

金か？そら大丈夫や。今売れてる佐田屋の旦那やで、心配は無用や。

兼

その心配はしてまへん、親御さんに対面張るんやさかい少々の出費は覚悟して来はつたことくらい呑み込んでます。

島村屋の旦那さんがご一緒やねんし。

春日部 ははは…ほな何や？

兼 都合つける女子やら、当日のご趣向はあてに一任してくれませう

やろか。もちろん、佐田屋さんのご要望もお聞きしますよってに。

春日部 分かった。お願いしますで。

島村 よっしや、決まったな。これで春日部幸次郎の顔も、わしの顔も

立つわいな。おおきに、おおきにやで。

島村がさりげなく金の入った包みを出す。

兼は何も言わずに受け取り、軽く頭を下げる。

島村 お。晴れて来たがな。

春日部 ころ幸先ええわ。

島村 ほな、お兼はん。

兼 何のお構いもしませんと。

島村 ははは…今日はお腹一杯や。

上機嫌で帰って行く二人。兼が見送っていく。

兼が封筒の中身を確認していると、昨日来た藤原が庭先に現れる。

兼 あんさん…この間の。

藤原 こんにちは。今日もお客さんですか？

兼 へえ、もう済みました。

藤原 ああ、じゃあ今日は僕の話聞いてもらえそうですかね。

兼 はい。なんの御用でっしゃろ？

藤原 あ、そうだ（背広の内ポケットから名詞入れを出す）この間は、

伏見町で用品屋をやつてると言いましたが、実は東京では元々

こういう仕事をしてましてね。（名刺を渡す）

兼 頂戴します。出版社さんでっか？

藤原 はい。阜月書房という小さなところですが。

兼 すんません、無学なもんで。

藤原 いいえ。細々やつてるんで、ご存知ありませんよ。

兼 ほな、伏見町のお店は？

藤原 友達と共同経営してるんです。というか、いろいろありまして、

やっかいになつてるようなもんですが。

兼 まあ、どうぞ。

兼が座敷に上がるように勧めるが、藤原は軽く手をふる。

藤原 いいえ、お気遣い無用。ここで結構です。

縁側に腰をかける藤原。そのまま座って応対する兼

藤原 いい家ですねえ。

兼 おかげさんで。丈夫に作ってもらいました。

藤原 いや、この間の地震で横浜の家を無くしましてね。ホテル住まいのままです。こういう家を見るとホッとするんです。

兼 そうでっか、そらお気の毒に。

藤原 関東大震災というくらいですから、仕方ありません。

兼 お家の方はご無事やったんですか？

藤原 ……(やや間があつて、思い直したように) はい。

兼 (しまったという表情) そうでっか。

なんとなく間がある。返事に間があつたのを察して静かに返事をしたまま様子を伺うような兼

庭先で小鳥が鳴いて飛び立った音がする。と、藤原がまた話し出す。

藤原 すみません。お願いに来たのに、のんびり座り込んで。

兼 ここがお気に召したんやったら、ゆっくりして行っておくれやす。

片付け物してきまつさかい。

兼がお茶を片付けに台所に行ってしまう。

藤原はタバコを出して、ゆっくりと火をつけて美味しそうに吸う。

さっきのわか雨が嘘のように、爽やかな秋晴れの午後である。

頃合いを見計らったように兼がお茶を運んでくる。

兼 何のお構いもできませんけど、おひとつどうぞ。

藤原 やあ、これは嬉しいな。ここではお茶が出てくることはないと聞いてましたが。

兼 まあ。

藤原 あ、すみません。失礼なことを。

兼 構えません。ほんまのことですさかい。

藤原 じゃあ、これは？

兼 お余りです。

藤原 あ、さっきのお客さんの…あはは…なるほど。こりゃいい時に来ましたね。頂きます。

一口お茶を飲む藤原。飲むとはっとする。

藤原 あ…これは新しいお茶…じゃ？

兼 いいえ、さっきのんだす。

にっこり笑う兼。新しいお茶を二番茶であると言い切つて座っている。震災で親しい人を亡くしたということを悟られた上での氣遣いと知り、藤原は改めて茶器を見て、ゆつくりと手の上でそれを抱える。

藤原 なるほど…。いや、大阪の人の氣遣いっていうのにまだ面食らいます。

急に人の懐に入ってきたかと思うと、引き離すように静かに見守られたり。厚かましいことを言うのに嫌味がなかったり、興味が深いのかと思つていたら、さりげなく 優しかったり。本当に深いですね。

はあ。

兼 藤原

あ、すみません。仕事の話をしなければいけませんでしたね。実はですね…うちの社で2年ぶりに「始末の極意」という本を出版することになったんです。上杉鷹山のことを書いた小説なんですが、東京も震災以降、儉約が流行しましたね。へえ。儉約が。

兼 藤原

ははは。あなたから見れば当たり前のことでしょうが。それで、その本に現代始末考という付録頁を作ることになりましたね。取材記事を集めているんですが、山城屋さんに話を伺いに行った所、あなたを紹介してくださったんですよ。「あの人はわしらの始末の裏をぬぐってくれる」と聞いて、是非あなたにご協力していただけないかと思つて来たんです…つて、僕の話、お分かりになりますか？

兼

へえ。よう分かります。お金の始末をどうやってしてるかちゅうことをお話したらええんでっしゃろ？

藤原

ええ、そうです。まさしくその通り！そう言えば良かったですね。どうも東京の人間は始末と言つと、けち臭い話だと思ひ込んでるところがあつて、いい印象を持たれないんじゃないかと心配してしまつたんですよ。

けちと始末はちやいまつせ。

兼 藤原

そう、皆さんそうおっしゃるんです。面白いなあ。日ごろは質素に暮らしていても、いざと言つ時にはお金を張り込んで、店の奥行きの広さを見せるのがほんまもんの商人。でしやう？

へえ、よう勉強してはります。

兼 藤原

先日話をお聞きした近江屋という店の御寮人さんはね

「ごはんつぶには仏さんが宿つてはるから一粒も捨てられへん」とおっしゃってました。船場の人たちは始末の精神の上に北御堂、南御堂の信仰心も加わってる。米は菩薩という結びつきで日々を

兼 生きている、ここがまた深い！（嬉しそう）
そない面白いですか？

藤原 面白いですよ！だいたい、江戸時代に何も生産することが出来ない。
農民や職人のような生産者から物を掠め取るという理由で、
士農工商の最低位に位置づけられた商人に、敬虔な心が宿っている
ということ自体が面白いです！

兼 僕だったら「何クソ、バカにしゃがって。商売で儲けた金で散在し
てやる」と思いますが、大阪の商人は代々綿々と質素な始末を続け
ている。いったい生きる原動力はどこにあるんですかね？

兼 あはは…
？なんですか？

藤原 すんまへん、大きい声だしてもて。そやけど、ものすごい
面白いこと言いはるんで。

藤原 僕の話が面白いですか？

兼 へえ。そないに始末に興味つけて、大きい声で喋りまくってはる
お方、見たことありませんよってに。

藤原 あ…こりゃあ失礼しました。いや、つい熱くなっちゃって。

兼が笑っているのを見ながら。いつきにお茶を飲む藤原。

兼 あては始末で気がつかれたらさんないと思います。

藤原 ほう？

兼 お客さんが来はったら、お金かけてお膳にええもん出すのが
普通のお家ですけど…

藤原 船場の始末屋は違いますか？

兼 始末しいは、いつもと一緒のおかずを上手いこと分けて出せる
知恵が利きます。

藤原 「メモ帳を出して書き留める」面白い話だな。それで？

兼 たとえば、4人家族で大根の炊いたんを2切れずつ食べてた
ところに、お客さんが一人来はったら、ざく切りにして、
上手いこと盛り付けたら誰も減ったことに気がつけへんし、
損もしません。それが始末の身奇麗なとこちやいますやろか。
ただケチやねんやったら、お客さん断つたらしまいですよってに。

兼 在る物を上手いこと置き換えたら、誰も気が付けへんし
誰も損せんと、みんなが仕合せにやっけて行けます。

藤原 あなたは、作家にもなれますね。

兼 いや、そんなあほな。あはは。

藤原 いやあ、そんな風に魅力的に解説されたら、いつかここで飯を食っ
てみたいなあ。

兼 おかずが減るさかい、息子が嫌がります。

藤原 そりや申し訳ない。あはは。しかし、そこまで始末して、貯めたお金を、いざという時に吐出すつても豪快だなあ。

兼 いや、それはお店の旦那さんらのなさることです。

藤原 あてらは地道に始末しながら暮らしていただくだけですわ。

兼 でも、そこに楽しみがあるんでしよう？

藤原 へえ。そらその置き換えがぴたと嵌った時は快感でっせ。

兼 それこそ幸せですわ。

藤原 物質的満足じゃないってことか、深いなあ。

兼 また、意味つけてはる。

藤原 あ。ははは…

笑い合ってる二人。気がつくくと、喜一がいつの間にか庭先に来ている。

兼 いや、きーぼん？どないしはったんです。

喜一 お邪魔かいな？

兼 そんなことありません。そやけど今夜は清が居りませんねん。

喜一 大学でお世話になった方のところにお礼に行ってますんで。

兼 今日の本読んでもらいに来たんちゃうんや。

喜一 ま、上がっておくれやす。

兼は草履もつつかけないで、裸足のまま喜一の手を引きに庭先に下りていく。その姿を見て藤原が立ち上がる。

藤原 じゃあ、僕はこれでお暇します。

兼 そうでつか。何のお構いもしませんで。

藤原 いいえ、美味しいお茶、ご馳走さまでした。

兼 また現れます。今度はちやんと取材料を持って参上しますよ。

藤原 そんな。よう笑わせてもらいました。おおきに。

兼 失礼します。

兼 帰って行く藤原。丁寧に頭を下げる兼。

兼に手を引かれ、靴を脱がせてもらって座敷に上がる喜一。

兼 堪忍だす、きーぼん。当てが違いましたなあ。

喜一 よう笑うてたな、ネエちゃん。外まで聞こえとったで。

兼 そうだっか？恥ずかしい。あのお方があんまり当たり前のことを

大真面目に言い張るさかいに…

喜一が急に兼に抱きつく。倒れこむように座る兼。

兼 きーぼん？

喜一 ネエちゃん…

兼 どないしはったんです？

喜一 目えが…

兼 え？

喜一 昨日から、昼でも目えがほとんど見えへんねん。

兼 ええ？

喜一 明るうても、影がちよつと分かるくらいや。いよいよや…

兼 もうネエちゃんの顔も見えへん。

喜一 きーぼん…

兼 覚悟してたのに、こない一気に見えへんようになると思うて

喜一 へんかったさかい、怖あなつてしもて…ひとりで家に

兼 よう居らんようになってしもたんや。

喜一 ほな、どないやつてこまで？外に出たら危のおますがな。

兼 車屋に頼んでこまで連れてきてもらたんや。

喜一 ここまで来たら、見えへんでも勝手が分かる思うて。

兼 そやけど、こまで来たら、ネエちゃんの笑うてる声が聞こえて

喜一 邪魔やったやろうか思うたら、すぐに声がかけれへんかった。

兼 そんな…遠慮なんかせんでも…

兼にすがりつく喜一。

兼 きーぼん。

喜一 堪忍や、一緒に居つて。なあ…どっこも行かんと一緒に居つて。

兼 大丈夫です。あてはいつもきーぼんの傍に居りまっせ。

喜一 手握つてて…手え。

兼は喜一の手を握り、しっかり抱いてやる。

静かに泣き出す喜一。兼が背中を擦つてやる。

夕焼けが2人の姿を包み込んで、座敷に長い影が伸びていく。

暗転

第四場

よく晴れた昼時である。秋晴れに庭のもみじが輝いている。遠くでポンポン船の行きかう音が聞こえてくる。道頓堀川を船が行きかっているらしい。そろそろ新米を運ぶ船が出る季節である。今日は先日の山城屋、篠山二郎衛門が娘を連れて、婚礼の席に出る料理の試食に来る日である。

女衆の修行に通つてきているユキが座布団を持ってきて、お師匠はんのメに置き方を習っている。ちよこちよこことよく働くユキ。

ユキ お師匠はん、来りましたで。

メ そうか。山城屋はんとこのこいさん、別嬪さんやろ？

ユキ へえ、お人形さんみたいでんな。わてと大違いや。

メ よう分かったあるがな。

ユキ そやけどお師匠はん、お座布団が足りませんで。

メ なんで？山城屋はんと、こいさんやろ？

ユキ もうひとり、ツルツルの大きい蛸みたいなオッサンが一緒です。

メ なんやて、山城屋のタヌキ。わざと急に人増やしよったな。

ツルツルの蛸：ああ、そら山田屋の万次郎や。

あちやちやちや、えらいのん連れてきよったで。

ユキ 偉い方ですか？

メ ああ、船場一のしぶちんで有名なオッサンや。みんなしぶちゆう

て陰で言うてるくらいやで。

ユキ お饅頭みたいな名前でんなあ。

メ 笑うてる場合やあらへん。山城屋のオッサン、お膳の中身を吟味す

るために連れてきたんやろ。抜け目のない男やで。

ユキ お座布団どうしましょう？

メ これ回すさいかまへん。(メが下座の座布団をさつと上座に置き換

える。)お兼はんのは無うてもおかしいさかいに。

さあ、それより料理や、大急ぎで2人分を3人前にせんといかん。

お皿出しておいで。

ユキ へえ！

バタバタと台所に行く二人と入れ替わりに、山城屋とその娘、恭子が入ってくる。

案内の兼が入れ違いに出て行くメに目配せをして何か手で示す。

メは胸を叩いて台所へ。

篠山恭子は船場のこいさんらしい、上等の絹物を何気ない顔で着こなし、肌の色は抜けるように白く、まだ化粧つ氣のないはずの頬は

紅をほんのり差したような桃色で、どこから見ても父親の自慢の娘であることがよく分かる。3人姉妹の末っ子とはいえ、この器量なら引く手あまたも

間違いない。なるほど山城屋が恭子の縁談に必要な以上に見栄を張りたくなる気持ちもよく分かるというものだった。

上座に山城屋、恭子。それに急に増えた客、仲人をする山田万次郎という船場で材木屋を営むケチで有名な商人が座わる。

奥から兼がきちんと紋の付いている羽織を着て現れる。

兼 お待たせしました。山城屋さん、今日はいいさんも。

この度はおめでとうさんでござります。

篠山 いや、おおきに。今日はご苦労さんでんな。

恭子 おおきに。

篠山 あんた、山田はん知ってるやろ？実は恭子の仲人をしてもらうことになつてな、急で悪かったが一緒に来てもらたんや。

兼 そうでつか。ようお越し下さいました。岩井に居りはったんで、

若い頃からよう知ってます。

しづ方 お久しぶりでござります。

そちらさんこそ。ご息災で何よりでござりまんなあ。

篠山 えらい他人行儀な。若い頃に同じ釜の飯食うた仲やろがいな。

しづ方 いや、お兼はんは、わてが奉公に上がった時はもうぼんぼんのお乳母どんやったんで、最初から身分が違いましたんや。

兼 大層なこと。身分もなんもあらしませんがな。

篠山 その、きーぼんやがな。ここに居るねんて？

へえ、2階に居りはります。

兼 いよいよ目があかんねんてな。

篠山 いいえ、ちよつと風邪気味なだけだす。お店の者にうつすんが

もみないちゆいはるさかい、泊まって頂いてるだけですねん。

しづ方 (兼の言い訳など聞いてない様子) あの若さで、得体の知れん眼病

患うたら、気鬱にもなりますやろ。母親代わりのあんさんここで

篠山 気養生するのが一番ええこっちゃ。

そらそうや、お兼はんが居つてやさかい、あの子もまだ良かった。

篠山 本家には親も兄弟も居れへんし、ここがあつて心丈夫やろ。

もう何年になる？

しづ方 7、8年だつか。大学に入りはった頃にはもう、視力が落ちてきた

ちゆう話をお聞きしとりましたさかいな。

篠山 気の毒に、身体もそない丈夫やないんやろ。岩井も一回、あんたら

暖簾分けの者と寄り合いせんといかんなあ。

暖簾分けの者と寄り合いせんといかんなあ。

恭子 お父ちゃん、きーぼん上で寝てはるのに、そんなこと言うて失礼やわ。

篠山 そうかてお前、跡取りさんがあれでは具合悪いがな。

恭子 他所のお家のことやねんから、お父ちゃんがやいのやいの言わんでええやん。

篠山 そらそりやが。こつちも商工会議所の役員やさかいな。

岩井ほどの昔から続いたお店の代替わりとなつたら、

あそこ後見人が居らんよつてに、話に加わらんとあかんようになるやろからなあ。あんたもそやろ？

しづ万 そら、こ本家さんにはシミひとつ付けるわけには行きまへん。

恭子 もう、お腹空いたわ。

しづ万 あ、すんまへん。

しづ万はいんぎんにお辞儀する。

兼 こいさんは、料理がお待ちかねでっしやろ。

恭子 へえ。

兼 ほな、まずは献立をご覧下さい。分かりやすいように絵で描いてありますよつてに。

恭子 いやあ、ほんまや。

篠山 ほう！

兼 ご説明せなあかんで、今日だけのもんだす。

篠山 流石に念がいつてあるな。

兼が図面のようなものを広げ、おおきなソロバンを篠山としづ万に見えるように差し出す。

篠山 あんたが描いたんかいな？

兼 いいえ、お師匠はんに描いていただきましたん。

篠山 絵描きの？へえ、手広いなあ。こんな請負やつてたら繋がりがなんぼでも広がりまんな。

しづ万 ふん。

兼 まず、なんぼ節約言うても、お祝いの席やさかい簡単に手は

抜けまへん。そやさかい、お金かけるとこはうんと張り込んで、

目立たせて、他のもんで帳尻合わせる方がええと思ひます。

しづ万 (絵を見ながら) 11品かいな。普通は末広がりや8つなもんやが、3品も多い。これでほんまに始末できまんのか？

兼 それも作戦だす。11にしたんは奇数で「いい」ちゅう言葉遊びの数だす。

しづ万 9は苦勞、10は偶数ちゅうこつちやな。

兼 そのとおりでおます。まず先付けは祝い肴三種。「黒豆、田作り、

昆布巻き」はご婚礼のことやし、外せません。

黒豆が普通やったら一升で40銭。ええもんは1円くらいします。

田作りはこの辺で買うのが一番安いでええとして、昆布巻きの
昆布と中へ巻く鮭、かんぴょうも上みてたらキリがおません。

兼がソロバンを弾いていく。ため息をつく篠山。

篠山 一皿目からこれかいな。先が思いやられるなあ。こんなことやった

ら、花子や登喜子の時にもうちよつと始末しといたら良かった。

可哀相に三番目の娘は苦労させるなあ。

かまへん、うち別にこんな贅沢なお膳せんでもええつて言ったのに。

何を言うとするねん。祝い膳は女側の里の懐の深いとこ見せな

あかんねんから。山城屋の娘が恥ずかしいお膳出せるかいな。

そうかて。

兼 大丈夫でっせ、こいさん。いとほんや中嬢ちゃんの時よりも

豪華に見えるように作りまっさかい。

しづ方 ほづ？そら楽しみでんな。数の子。焼き魚。伊達巻。海老に紅白の

なます…これなんや？ああ、のし鶏でんな。煮しめ…おつゆに

色ごはん。いやバラ寿司か。ほう贅沢なこつちや。

ほんで、お菓子で11か。これざつと見積もつたら…

しづ方が兼のソロバンを横から弾いていく。

しづ方 原価だけで、一人前3円くらいするで。まだ御酒もおますしな。

篠山 3円！堪忍してや、200人からの宴会やで。他にまかないも

仰山出さなあかんのに、料理だけでそない払えるかいな。

桐の箸筥が5、60も買えるで、ほんまに。

しづ方 ほんまでんな。いっそ料理ださんと、小ぶりの箸筥配つたら
どないです？

てんご言わんといっておくれやす。大丈夫だす、一人前1円20銭で

なんとかなりそうです。

兼 え？半分以下やないか？ほんまかいな？

篠山 一番節約できるんは、鯛だす。

しづ方 鯛？ほんまかないな、これが一番値張るで。

兼 そやさかい、11品にして、お皿を小さうしたんだす。

一番大降りの鯛を、新しいご夫婦の高砂の前に飾りまっしやろ、

それにはうんと値の張った大きいもん置きます。

ほんで、お客さんの鯛は小ぶりのもんを回しますねん。

しづ方 見栄が悪いんとちゃいまつか？

兼 みんな大きい鯛をずっと見てるさかい、自分のお皿の焼き魚が少々小そうても気がつきませへん。お皿もそれに見合つて小ぶりにするさかい、対比でますます分かれへん。

鯛は大ききで全然値が違いますよつて、ここであうんと稼ぎますんや。なんぼ浮きますんや？

兼 上手いこと仕入れたら100円。

篠山 100円！

しづ万 箆筒、10棹買戻しましたな。

そこにお膳が運ばれてくる。

台所で盛り替えが終わつた様子。アとユキが運んでくる。

兼 ア 失礼します。

ああ、言うてる間にほんまもんが来ましたで。食べながら見ておくれやす。

色鮮やかなお膳だが、しづ万にはお椀と小さな皿しかついてない。

しづ万 これは？

兼 山田屋はんのは杉の折にしています。いつも宴会でお汁とお魚一切れしか手つけんと持つて帰りはるちゆうて

聞いてますんで。それやつたら先からさせてもろといた方が、お茶碗洗う手間省けますさかい。

しづ万 む。

兼 綺麗やわあ。

えらい小盛りでおまんな。貧相やないかいな。

兼 今日試食ちゆうことやつたんで、ちよこちよこ盛りにしてあります。こいさんもこない仰山お食べになられへん

やろし、ばら寿司と伊達巻はお土産にしますんで。

兼 いや、おおきに。両方ともお母はんの好物だす。喜びますわ。

しづ万 そうですか、それ偶然でも宜しゆうございました。

兼 ほんで、他の節約はどこでしまんねん？

篠山 そや、それや。

兼 へえ、次に値の張るんは、意外とかまぼこだす。

しづ万 かまぼこ？

兼 へえ、そうだったか。いつでもおうどんに入ってるのに。

兼 ええかまぼこは高うおっせ。

兼 へえ。

兼 普通は紅白にして3切れ出すのが縁起もんやけど、見てもろてる通り、グイチに切つて市松にします。市松模様は縁起がええし、

しづ万 見た目も華やかやさかい一枚少のうても分からしません。なるほど。確かに儉約して薄う切ったら、後でけち臭い言われ

まっさかい、祝言やったらなおさら厚めに切らんとあきませんしな。そうしたらやっぱいかまぼこ一枚で10切れはとらなあかん。

これが普通10人で3枚要るところを2枚ですませたら…
200人やったら20枚浮きまんな。

兼 山田屋はんの口からけち臭いちゅう言葉が聞けるやなんて、面白い日だんなあ。

しづ万 わては、けち臭いのん大嫌いですよつてにな。ただ、使える物を捨てるほどアホな事はせんだけです。

兼 ほな、こ飯もんはお気にめしますやろ。かまぼこの端っこを切り落とした分やら、お煮しめの野菜の切りくず、椎茸の小さいのん、小ぶりの海老やら、伊達巻に余らす卵やみんなバラ寿司にいきますよつてに、その分も浮きます。

しづ万 む。ほんでかまぼこはなんぼ浮くんたす？

兼 祝言のかまぼこは下手したら1枚50銭くらいするさかい、

2枚で1円。20枚で10円浮きます。(とろばんをはじいて)

桐の箆筒もう一棹買戻しましたで。

篠原 ほんまやな。

しづ万 他の物はどこで仕入れますんや？

兼 海老と鯉節は豊岡の方で買うて、鶏と卵はそのまま岡山の方に馬車で回って仕入れたら工賃入れても80円浮きますわ。

お煮しめの椎茸は兵庫の知り合いに頼んで20円。

黒豆は琉球のん使ったら20円浮く勘定出す。

しづ万 琉球に黒豆があるんかいな？

兼 大つぶで綺麗でっせ。味もええし。あとはもち米と野菜を奈良の農家で一手に引き受けさせて60円浮かせる。

しづ万がソロバンをいつの間にか独り占めして夢中になっている。

しづ万 へて270円。

恭子 すじい。

篠山 ようやってくれはったなあ。お兼はん。

しづ万 まだだす。

篠山 なんだ？

しづ万 宴席で一番金の張る物忘れてまへんか？

篠山 一番金の張る物…

しづ万 御酒だんがな。

篠山 あ。えらい大物が残ってたがな。

しづ万 お兼はん。あんさんが女らしい気遣いでなんぼ小さい物始末しても

お酒の算段せな予算減りまへんで。

兼は慌てずに、台所に向って手を打つ。

べが酒を用意して持って来る。

しづ万 なんです？

兼 お酒は後にしようと思うてたんですけど。

しづ万 なんや、用意があるんかいな。

兼 ま、一杯飲んでおくれやす。どうぞ。

杯を差し出して、日本酒を注ぐ兼。しづ万は嫌味な表情で受け取って飲む。

しづ万 むむ。

篠山 くないや？

しづ万 飲んでみなはれ。

篠山 それが、あんた。わて下戸だんねんがな。

しづ万 そうでしたな。

恭子が杯を取ってにつこり笑う。

恭子 うちがお味見します。

しづ万 へ？

兼 いやあ、こいさん。隅に置けまへんな。(酒を注ぐ)

恭子 美味しい。あっさりしてて、口当たりが宜しいわ。

しづ万 むむむ。

兼 そうでっしやる。このお酒、近年一番の出来やて蔵元さんも

言うてはるんです。来年売り出す前に、船場のご大家の皆さんに

飲んでもらえる機会になるんやったら、樽二ついただけることになりましたんや。

3つ！

いただける？

ちゅ、ちゅう…「こととは…ただでっか？」

兼 ひとつは難波神社さんに、山城屋さんからの「奉納」。2つは祝言に

回して、あとの5つは原価で買わせてもらうことと話がついてます。それやったら料理は一人あたり1円20銭でなんとかかなりそうです。

篠山 ようやってくれはったーいやあこいまでとは。おおきいこ、おおきいこ。

しづ万 どの酒ですんや？銘柄はちゃんとしてありますやそな。

兼 伊丹の劍菱さんです。

しづ万 一流や。なんでまた劍菱がそんな世話を…

兼 江戸時代に伝法船出してはったお店の旦那さんの口聞きます。

山城屋さんのこいさんの祝言やったら、言うてくれはりましたんや。

へえ、老舗のお店だんな。あんたどんな人脈だすねん？

兼 それはこっちの内緒事です。ご縁繋いで始末に繋げるんが

あての仕事でっさかい。

しづ万 むむむ…

兼 山田屋はん、ソロバンの手が止まってまっせ。

しづ万 む。

兼 (ソロバンを弾いて) お酒でこれだけの浮きでおます。

しづ万 !

兼 いやあ。ここまで手抜かんとやってくれてるんやったら、

わざわざ、あんたに吟味に来てもらわんでも良かったな。

そう言われて立場のないしづ万。渋い顔で兼を見る。

兼 ほな、お次はお祝いの席の余興をやってもらおうお方を

お呼びしますんで。

兼 篠山 え、そんな手配まで出来てるんかいな。

兼 知り合いの知り合いに、ちよつと京都に居られへんようになつた

狂言師が居りますねんわ。今やったらご祝儀はええさかい、

飲み食いだけさせてもらえたらちゆうて。

兼が廊下で奥に向って呼び声を上げる。

兼 九衛門はん。九衛門はん。

九衛門と呼ばれた男が紋付羽織姿で廊下の向こう側から走ってくる。

九衛門 はーっ。お前に。

兼 ねんのう早かった。

一同は大笑いしてはしゃぐが、しづ万だけはきよとんとしている。

篠山 ご趣向やな。

兼 いやあ、一辺言うてみたかったんです。おおきに九衛門はん。

九衛門 いいえ、お兼はんのためやったら一日に百編でも言いまっせ。

兼 いいえ、一生の思い出にこれ一回で結構です。

こちらが山城屋さん、こいさんの恭子はんだす。

九衛門 作用でございますか、いやはんまにこの度はおめでとうさんで

ございます！山城屋さん万歳。万歳。万々歳！

篠山 軽い男やな。

九衛門 食い詰めでっさかい。

兼 そんなことあれへん、しくじりの期間だけ大阪に居ったら、

またいくらでも売れっ子に戻りあります。

そうでっしやるか？私に戻るところおますかいなあ。

九衛門 これ、祝言の下合わせやさかい、げんの悪いこと言うたら

あきません。

九衛門 なんで、こいさんがお嫁に行きはるんでっしやる。

ほな戻るところがない方が宜しいがな。あつたら出戻りで不謹慎や。

篠山 上手い！

九衛門 上手いこと言うたのに、なんか身に堪えますわ。

篠山 ははは…ほんで何をしてくれるんや？

九衛門 へえ「二人大名」の中にでてくる「起き上がりこぼし」をと、

お兼はんからのご指示でございます。

兼 ほら、もうお酒も召し上がってますよつてに、みなさんちよつと

戯言が嬉しい時間の余興でっさかい。

九衛門 こいさんにもちよつと、ご協力していただければと思つてます

ねんけど、宜しおますか？

恭子 へえ？

九衛門 難しいことおません。私が「合点か？」と聞いたら、大きい声で

「合点じゃ」と言うてくれはつたらええんです。

恭子 合点じゃ！

九衛門 きさんじなお方でんな、今やのうて、合点かとお聞きしたら、

言うて下さい。

恭子 あ、すんまへん。

九衛門 さ、ほな参ります。お手を拝借。

九衛門が扇子を打って手拍子を始める。みんなそれに習う。

「起き上がりこぼし」を唄い始める。

九衛門 ハア、京に京に流行る、起き上がり小法師、やよ。

殿だに見ればつい転ぶ、つい転ぶ。

合点か。

恭子 合点じゃ。

九衛門 合点、合点、合点じゃ。

何回かその繰り返しがあり、みんな意味が分かって大笑いになるが、しる万だけはますます慥然としている。

篠山 ははは。こらええわ。こいさん、ええ嫁さんになれるぞ。

恭子 いやらしいわ、お父はん。

篠山 なんや、意味分かってるで。あはは。

兼 九衛門はん、流石に本職さんは声がちやいますなあ。

兼 おおきに、これで山城屋さんの宴席がぱつと華やかになります。

兼 いや、こんなことでよかつたら船場中の祝言にうかがいます。

兼 おまんまかかつてまっさかいな。

兼 もうええから、台所にお膳の用意があるさかい、食べて行つて

ユキ おくれやす。(奥に向つて) ユキ、二案内して。

兼 (九衛門の真似をして狂言風に) へえええ。お前に。

兼 いや、この子。

みんな爆笑。ユキと九衛門がお辞儀をして引つ込んでいく。

篠山 いやあ、恐れ入った。こら祝言が楽しみになつてきたな。

恭子 お兼はんは、どないして、あんな人と知り合いになりますん？

兼 え？

恭子 そうかて、ただの人脈とちやいますやろ。女子の人やのに、

兼 すごいわあ。

しづ万 この人、昔から人の言うこと断つたことがないんだす。

兼 山田屋はん？

恭子 へえ？

しづ万 女衆の時から、どない嫌な仕事でも「へえ」としか言わへん。

篠山 何とかやり遂げる。それが今日に繋がったんちやいまつか。

しづ万 ははは。珍しい、しづ万が人を褒めてるで。明日は雨やな。

兼 褒めてまへん。ほんまの事だす。

篠山 山城屋さん、こんなことで、お聞きしてるご予算に合いますやろか？

兼 合う、合う。合うがな。いやあ助かった。これで山城屋の顔も

篠山 立つし、身上にも響けへんし。お兼はん様様やで。

兼 これからは足向けて寝られへんなあ。

兼 大層なこと。おおきに。

篠山 山田屋はん、あんさん何ぞおますかいな？

しづ万 いいえ、ここまできちんと始末が行き届いてるんやったら、

兼 何も言う事おまへん。

兼 おおきに。

篠山 ほんなら、お暇しようかいな。

兼 もうお帰りでつか？まだそない食べてはれへんのに。

篠山 いやあ、ちよつと回らんといかんとところがあるんや。

兼 あ、そうやお兼はん。これ悪いねんけど、次の時まで預かつて

篠山 もらわれへんやろか。

篠山が懐から小ぶりの風呂敷を出してくる。

兼 へえ、お預かりします。

篠山 意外に重うてな。帰るまでに肩こりそうやったから、助かるわ。

恭子 お父はん、うちが持ったげますのに。(持とうとする)

篠山 ええんや、急ぐ物やないさかい。(お兼に渡す)頼んまつさ。

兼は心得ているようで、すぐに風呂敷を預かって床の間の飾り棚にしまう。

兼 ちゃんと、お預かりしますんで。

篠山 おおきに。

兼 こいさん、お気をつけて。

恭子 おおきに。今日は面白うおました。

兼 喜んでもらえて何よりだす。

恭子 うちも困ったら、ここに來てよろしい？

兼 そら、こいさんやったら何時でも歓迎です。

恭子 心強いわ。

篠山 こら、恭子。ここのことは内緒やで。

恭子 みんなの秘密の家でっしゃろ。

篠山 叶んなあ。

山城屋、恭子は笑いながら玄関の方へ。着いて出て行くしづ方が兼にいきなり深々と頭を下げる。

兼 山田屋はん？

しづ方 ええ勉強させてもらいました。

兼 へえ？

しづ方 正直にいうたら、わてはあんさんみたいな、便利に裏商いする人間が性に合いまへんねん。けど今日は女子でも知恵があつたら生きて行けるちゆうことがつくづく分かった。

兼 そうでつか…

しづ方 船場の中にはあんさんが心底嫌いなお方がおまつしやるな。

兼 え？

しづ方 いや、すんまへん。居丈高にも言う旦那さん方の中にはあんさんみたいな女子に居つてもろたら困るお方も居るんちゃうかいなと思っただけです。

兼 ご心配おおきに。

しづ方 清ちゃんを岩井の若旦那にしたら、もつと多うなりまつせ。

兼 気いっけなはれや。

兼 清は普通に勤め人にしまつさかい。
しづ万 そらええ。そうした方がお為だす。きーぼんがここに居るのはええ
が、お店のことは男に任せておくこつちや。

一瞬、睨み合っているが、兼がにっこり笑う。

兼 お土産、お忘れのないように。
しづ万 おおきに、はばかりさん。

儼然とした顔つきで帰って行くしづ万。兼はちよつと怪訝そうな顔つき。
玄関でユキと九衛門が送っている声がする。

兼が片付けに入ってくる。

兼 上手いこと行つたんやな？

兼 お師匠はん、さつきはおおきに。

兼 いいや、あんたの指示が良かったんや。しづ万の折には

兼 お煮しめばかり入れとききましたで。

兼 いや、お魚は？

兼 そら、今からみんなで味見やがな。

兼 もう、お師匠はん。

兼 文句は言うてけえへんやろ。ただ食いに着いて来たんやさかい。

兼 あはは…ちよつとすつとしたわ。

兼 なんや？

兼 なんでもありません。さあ、今日はご馳走だつせ。

兼 ええとこ、余らしてあるぞ。

兼 飲みまひよ。

片付け物をする女たち。

ユキと九衛門も加わって、座敷を綺麗にして台所へ。

喜一が二階から本を持って下りて来て、縁側に座っている。本を開けてじつと見入っている。

そつと入ってきた百花が、その様子を見ている。

それには気がつかないまま、本を見つめている喜一。

百花 すんまへん。

喜一 (ハッとして慌てて本を隠す) 誰？

百花 いや、そない驚かれたら、こつちがビックリするわ。

喜一 どなたさんです？

百花 東雲町の百花と申します。お兼さん、おいででしようか？

喜一 ああ。ネエちゃんは今もう戻って来ると思いますが。

百花 そうでつか。ほな、待たせてもろても宜しい？

喜一 すんません。知らんお方はちよつと…

百花 なんて、この間ここで会いましたかな。

喜一 あ、すんません。僕、にわか盲ですわ。お顔があんまり

分かれへんさかい、堪忍です。

百花 そうみたいでんなあ。若いのに気の毒やわあ。

喜一 おおきに。

百花 (顔を覗き込む)

喜一 なんだす？

百花 なんや、見えてますやんか。

喜一 完全な盲目やおませんわ。まだ影くらいはチラチラ分かります。

百花 へえ、そこでつか？。見えてたもんが見えへんようになるて、

不便でっしやろ？

喜一 ふふふ…はい。

百花 なんだす？

喜一 いや、あんまりはつきりもの言いはるから、可笑しいなつてきました。

百花 いや、またやらかした。そうですわ、あて言いたいこと言いなんが玉に瑕ですわね。こう見えても黙ってたらどつかの御寮人さんみたいでっしやろ。いや堪忍、見えへんかったんや。

喜一 あはは…気にせんでええですよ。世の中は目に見える人のために作られてあるわんさかい、言葉もなんでもそうや。見えへんようになつたら、それがよう分かります。

百花 へえ、そんなもんでつか？

喜一 「こう見えても黙つとつたら…」「見てくれが悪い」「見よう見まねでやってみる」「人を甘く見る」「バカをみる」「見た目はそない

変われへん」

百花生 ほんまや。仰山おまんなあ。

喜一 人間は小さい時に「よう見聞きして覚えなはれ」と言われて育って、最後には「人生を振り返って見ると」で終わる。見てばかりやへえ、面白いもんでんあ。そんなこと気にしたこともおまへんわ。僕もです。こうなるまではね。勝手なもんですわ。

清が旅行鞆を抱えて戻ってくる。

清 ただいまあ。

喜一 清ほんか？おかえり。

清 あれ、きーぼん。居ったんや。

喜一 一昨日からずっと居るんや。2階占領してるぞ。

清 かまへんよ。(百花に) こんにちは。この間の？

百花 どうも。改めまして、東雲町ちゅうとこに居る百花と申します。

清 お母ちゃんに会いにきはったんですか？

百花 そうですねん。お姉さんにちよつとお尋ねしたいことが

おましてなあ。お留守でつか？

清 居らんのか？

喜一 仕入れの算段に出てるんや。メさんも、あの元気な女衆も。

清 ああ、あの不細工な。ユキちゃんやろ。

百花 なんや大勢で住んではりますんやなあ。

清 いいえ、ここは僕とお母ちゃんだけです。

喜一 あとはみんな居候やら、通いですわ。

ぼんぼん二人はクスクス笑っているが、百花は不思議そう。

清 まあよろしいやん。百花さんもお茶くらい飲んで行きはりますか？

お母ちゃんが居たら出してもらわれへんでしよ。あ、菊屋の

おまん買うてきたし、みんなで食べよ。

喜一 なんや、東京みやげちゃうんかいな。

清 アホらしい。東京のお菓子なんか美味しいないで。

煎餅は上手いねんけどな。

喜一 あちやらさんは醤油好きやさかいな。

喋りながらもさつさとお茶を入れに行く清

百花生 男の子やのにマメでんなあ。

喜一 ネエちゃん仕込みやさかい。

百花 ネエちゃん、ネエちゃんって。ぼんぼんはお兼はんの弟さんと
ちやいますやろ？なんや関係がいまひとつ分かれへんわ。

喜一 お兼はんは僕のお乳母どんです。僕が小さかったから、
お兼って言われへんかって「かね」の「ね」だけ伸ばしてネエちゃ
んって呼んでたんで。

百花 ああ、お姉ちゃんやのうで、お兼えのネエちゃんでつか。

喜一 最初は「おかね」の頭だけとって「おかあちゃん」って言うてた
そうですけど、それはややこしいちゆうんで、替えられたんですて。
ぼんまや、お兼はんって、上だけとったら「カアちゃん」下とった
ら「ネエちゃん」名前までよう出来た人だんなあ。

喜一 まあ、今はまたお母ちゃんと一緒みたいなもんです。
百花 へえ。

清がお茶とお菓子を運んでくる。

清 お待とうさん。

百花 いや、すんまへん。ぼんぼんにお茶なんか入れさせて。

清 僕はぼんぼんちやいまっせ。

百花 もう、船場の決まりはややこしいて、頭ごちやごちやなりますわ。
喜一 住んでる僕らでもなりまっせ。あれせえ。これせえ。

百花 これ食べる日やの、着る日やの、一年中そんなんばかりや。

喜一 邪魔臭そうて、うんざりですわ。

百花 なんでそんな決まりばかりなんでっしやるなあ。

喜一 結局は識別するためや。

百花 識別？

喜一 自分らと他人を見分けることです。あ、また見るちゆう

百花 言葉が入ってるな。

喜一 ほんまでんなあ。

二人がくすくす笑っている。不思議そうな清。喜一に茶を渡してやる。

清 熱いで。

喜一 大丈夫や。

百花 仲良ろしいなあ。

喜一 そら、兄弟やさかい。な？

清 うん。

喜一 僕が唯一頼れる弟です。

百花 へえ。船場のぼんぼんって、なんやはんなりしてて、女子みたいな
とこおますなあ。

喜一 そうですか？頼まないだけでっしやる？

百花 あはは。あんさんも言いたいこと言いやな。

そこに兼が戻ってくる。百花を見ると、指差して。

兼 居った。

百花 なんですか？

兼 ええのんが、居ったわ。お師匠はん、ここに居ったで。

兼が玄関先に向って大きな声で叫ぶ。

兼 ちようどええわ。あんた駿河屋はんにはご挨拶行つたんかいな？

百花 それがまだでおますねん。あの書付に分からんところがあるさかい、

聞きに来ましてんわ。

兼 なおさらええわ。妾のお披露目の稽古する気あれへんか？

百花 へえ？

兼 何も言わんと座つててくれるだけでええねん。

百花 面白そうでんな。

兼が入ってきて、すでに話を理解している様子。

兼 ほんぼんら、お邪魔してます。これかいな？

兼 ふん。ええやろ？

兼 あんさん、桁又なんぼや？衣装合わせするさかいに、

ちよつとおいで。

兼 うちよりよつと大きいくらいでっしやろ。

兼 女たちはわいわいと二階へ行つてしまふ。

残された喜一と清は吹き出す。

清 なんや今のん？けたたましいなあ。

喜一 清ほん帰つて来てるのん分かつてたんやろか？

清 もう、お母ちゃん。またなんかやらかす氣いかいな。

喜一 なんやしらん、今度はここでひとき居するらしいで。

清 どういうことこつちや？

喜一 あとで聞いたらええがな。ほんまにネエちゃんはじつとしてる

時ないなあ。

清 僕を一人前にするまでは、ああやつて働きまへるつもりや。

喜一 ええお母ちゃんやなあ。

清 うん。そう思つてる。きーぼん。おまんじゅう食へてや。

喜一 べこや？

清 お皿見えてへんのんかいな？
喜 うん…3日くらい前から急に進んでな。そのままここで
清 寝込んでるねん。
喜 そうやったんや。
清 いやいよ、来るべき時が来たちゆうこちや。清ぼんが東京の
喜 大学で戻ってきたら期限切れみたいに。神さんもうまいこと
清 してくれはるわ。
喜 きーぼん。その話…
清 清ぼん、店のこと頼むわ。
喜 それは言うたらあかんよ。
清 自分で。僕は今までも本気やったんやで。自分の身体のことば
喜 自分が一番よう知ってる。僕の目はもうあかんのやろ。
清 そんなこと言うたら、お母ちゃんが泣くで。
喜 しゃーない。ほんまのこっちや。
清 ほんまのことは言わんこっちや。
喜 ははは。ネエちゃんのお株取ったな。
清 きーぼん。僕には無理やわ。あんな船場のご大家、とてもよう
喜 継がん、怖あて出来へんわ。
清 清ぼんやったら出来るて。僕もネエちゃんも付いてるがな。
喜 そうかて…
清 決心固めといてや。もう僕は商工会議所に届けるつもりやさかいに。
喜 待って、お母ちゃんに相談してからや。
清 ネエちゃんは感情的になるからあかん。届け出してから口説いた
喜 方がええ。
清 ……
喜 頼むわ、あんただけがこの世の中にたったひとりだけ血を分けた
清 弟なんや。他に頼れる人誰も居れへんねんさかいに、助けてや。
喜 ……うん。
清 うん、言うてくれたな。ほな決心してくれるんか？
喜 きーぼんは、僕にとつてもたったひとりの兄貴やさかいになあ。
清 病气やのに見捨てられへんわ。
喜 おおきに。おおきに
清 清の手をとつて泣き始める喜一。
清 きーぼん、そんな泣かいでも。
喜 堪忍、堪忍。安心したんや。もう何年もどないしようか思つて
清 抱えてきたさかいに。やっぱり持つべきもんは兄弟やなあ。
喜 きーぼん。

女たちの笑い声の上から聞こえてくる。

清　　なんや賑やかやなあ。おまん持って行つてくるわ。

喜一　僕も行くわ。

衣裳選び言うてたやろ。見立てに男が必要や。

清　え？そやけど、きーぼん、目えが。

喜一　見えへんでも、女子が似合う着物着てるかどうかくらい、
声で分かるわ。

へえ、流石やな。

喜一　清ぼんも船場で暮らすようになったら、分かるようになるて。

清　　そんなもんかいな。

喜一　さつきからいつもより高い声が聞こえてくる。面白そうや、行く。

喜一　は廊下づたいに二階へいそいそと行つてしまふ。呆れてみている清。

清　　なんや、今泣いとつたのに。やっぱりおんぼんには

叶わへんわ。

饅頭をもつて上に上がつていく清。

女たちのきやあきやあ騒ぐ声が聞こえている。

第六場

数日後の深夜。人が寝静まったような時間である。辺りを見回しながら庭から男が忍び込んでくる。座敷の飾り棚を探っているが、探し物が見つからない様子。そこにもうひとり庭から人影が見える。連れのようである。

恭子 勇吉、あつた？

勇吉 へえ…それが…

恭子 何してるんや、早うしいな。

勇吉 それがなんやこの棚…

恭子 もう、ドン臭いなあ。

勇吉 そない、急がさんとおくれやす。暗いんで…あれえ。

恭子 もう、なにやってるんや。ちよつと待ち。うちが見るさかい。

勇吉 すんまへん。

連れはどうやら、山城屋の娘、恭子のようである。

この間とは違つて、地味な着物姿。

恭子 ここに仕舞うたはずや。

勇吉 こいさん、あんまりガタガタしたら…

恭子 大丈夫や言うたがな、今夜は誰も居らへん。文楽座に入って

行きはるん見たがな。

勇吉 そらそりでっけど。

恭子 ここに仕舞いはったんや。いや、なんで開けへんの？

飾り棚をガタガタいわせて必死で開けようとする恭子
しかし、なにか仕掛けがあるのか開けられない。

すると、パツと明かりがつく。驚いて座り込む二人。

勇吉 ひゃあああ！

恭子 ！

二人は抱き合っている。廊下の向こうからなんと藤原が現れる。ラフな格好で急いで着替えた様子が伺える。

藤原 誰だ？

勇吉 すんません。すんません！つい出来心で。ほんまたす！

藤原 …手を、手を上げていたまえ。

勇吉　へえ。こうだったか？

藤原　（恭子に向って）君もだ。

恭子　はい（手を上げる）

藤原が警戒しながら入ってくる。

藤原　なんだ、まだ子供じゃないか。

兼が恐る恐る覗いている。長じゅばんに長羽織姿である。

藤原　お兼さん、大丈夫ですよ。入ってらっしゃい。

兼　へえ…

兼が入ってくると顔をそらす恭子。

兼　いや、あんさん。山城屋のこいさん？

恭子　違います。人違いです。な、あんた？

勇吉　そ、そ、そうだんすねん。よう間違えられるんだす。

兼　下手な芝居やなあ。

藤原　お知り合いですか？

兼　へえ、まあ。こいさん、手下しておくれやす。

恭子　ほんまに、人違いですんぞ。

兼　ほな、どこのどなたか存じませんけど、な。

恭子　すんません。

兼　ともかくまあ、ちよつと落ちついて。藤原さん、すんませんけど、

藤原　表の錠を下ろしてきてもらまへんやろか。

兼　いいんですか？坊ちゃんたちが帰ってくるでしょう。

藤原　まだ大丈夫です。浄瑠璃に行ってるんで、忠臣蔵やさかい

兼　七段目までは居りますわ。

藤原　そんなもんですか。

兼　こいさんも、それやから、あてが戻ってけえへんと思うて

恭子　はったんでっしゃろ？

兼　文楽座に入って行きはったさかい…

恭子　読みは合うたあつたのに。堪忍でっせ、今夜はきーぼんと清が

兼　聞きにいつてますねんわ。あては送って行っただけだす。

恭子　そんなん…

兼　こんなこと初めてやのに、重なるやなんて…ほんまに悪いことは

恭子　出来まへんなあ。

兼　…うちは悪いことなんかしてまへん。

勇吉　こいさん。

恭子 悪いのはお父ちゃんや。勝手に縁談決めて…うちは…うちは…

泣き出す恭子。勇吉がオロオロと恭子を見守る。
錠を下ろして戻ってくる藤原

兼 すんまへん。

藤原 いや。僕はいいんですが…どういうことですか？

兼 かけおちだすわ。

藤原 かけおち？

兼 これもええ取材材料でっしゃろ。最近、船場は年に何組も、

かけおちがおますねん。震災以降に東京のお方が頻繁に入ってくる
ようになって、若い人の考え方が変わってきたんやと思います。

恭子 お兼はん、お願いします！このまま逃がしてほしい。

兼 こいさん。この丁稚がそない好きでっか？

恭子 ……

勇吉 こいさんは悪いことおまへん。わてが悪いんです。

堪忍しておくれやす。

恭子 好きです。

勇吉 こいさん？

恭子 うちはこの人のこと心底頼りにしています。ほんまもんの男やと
思っています。

兼 なんでそこまで思うてはるんです？

恭子 勇吉はうちのほんまの顔を知ってて、尽くしてくれました。

兼 ほんまの顔？

勇吉 こいさん、言うたらあきまへん。

恭子 ええから。お兼はん。うち、ほんまは一昨年好いたお方と一緒に
暮らして、女の子産んだんだす。

藤原 !

兼 そうだっか。どつりでお酒もペロツと飲むはずだんな。

恭子 そやけど、店の者に見つかって引き戻されて、子供は里子に出され
ました。うちはその時、何としてでも子供と一緒に居りたかった。

兼 そやのに…犬か猫の子みたいにお父ちゃんがひよいて抱いて、
お乳母はんに渡すのん見て…自分はなんて無力なんやろうって
思うたら…辛うて辛うて…

藤原 ほんで、今度の縁談を承知しはったんでんな。逃げるつもりで？

兼 ええ？

藤原 (睨みつける) 船場の女が家から出るにはそれしかおまへん。

兼 ほんまでんな。

藤原 しかし、その最初の旦那さんはどうなされたんです。

恭子 示談金貰うたら、手のひら返して東京へ行きました。学校の先生

藤原 酷いな。
兼 お金に負ける人の方が多いもんです。

藤原 なるほど。

兼 可哀相にこいさん、えらい目に合いましたな。

兼 そやけど、その腹いせに若い丁稚と一緒になつても、

兼 また失敗しまつせ。

兼 そうやおません。勇吉は、うちの子供を引き取つてきて

兼 くれたんです。

兼 ええ？

兼 この人の里が偶然、うちの娘が里子に出された村の近所ですてん。

兼 なんですて？

兼 いや。誘拐したんやおまへんで、こいさんから事情聞いて思い当た

兼 る子がおつたんで…うちの母親と里親先に日参して引き取らせて

兼 もろたんだす。ほんまだす。

兼 けど、向こうはよく手放しましたね。

兼 お金はどないしたん？

兼 え？えええ？

兼 うちの着物売つてきてもろて、渡しました。

兼 まさか。子供を買い戻したつてことですか？

兼 そら、里親はただでは引き取りません。

兼 (絶句している)

兼 あんた、ようそこまでやったなあ。

兼 この人がまだ丁稚なんかは、うちのために頻繁に里に戻つてくれる

兼 からなんです。ほんまやつたらもう手代になる歳やのに。

兼 こいさん、もう宜しいて。

兼 なんて、ほんまのことやない。しようちゅう里に戻るもんやから、

兼 お父ちゃんに皮肉たらたら言われて。もう、あれ聞いてたら、

兼 うち申し訳のうて。

兼 勿体無うおます。

兼 お兼はん。うちは、出世もなんもかも棒にふるて尽くしてくれる、

兼 この人とほんまに逃げて一緒にになりたいんです。

兼 そやけど…その里のお母さんと子供さんにも手が及びますやろ。

兼 それは…この足で一緒に里に出て、4人で北陸の親戚のところに

兼 行こうと思つてますんで。

兼 あのお金があつたら、何とかあります。

兼 結婚してから逃げるつもりやつたんを、計画変更して、あれを盗み

兼 に来たちゅうわけでつか。

兼 知つてます。あれはお父ちゃんが闇で儲けたお金やさかい、

兼 店に入れられへんのや。今までにも何回も見たことあります。

恭子

兼

恭子

勇吉

兼

恭子

勇吉

恭子

勇吉

恭子

兼

藤原

兼

藤原

恭子

藤原

兼

藤原

勇吉

兼

恭子

兼

恭子

兼

藤原

兼

藤原

人の名前で買うてる株の配当金、それも口裏合わせて儲けた
お金です。

兼 そやから、娘のこいさんは盗んでもええんでっか？

恭子 それは…

兼 勇吉…さんやったかいな。

勇吉 へえ

兼 あんさんは、こいさんのこと好きなんか？

勇吉 好きやなんて。そんな…

兼 好きかどうか聞いてますんや！

勇吉 へえ…お慕いしとります。

兼が飾り棚を開けて、山城屋から預かった包みを取り出す。

兼 残念やなあ、こいさん。これはお金とちやいまっせ。

恭子 え？

兼 証券でおますわ。お金に替えるんはまだ先のことですしやろ。

恭子 ちよつと読みが早うおましたな。

兼 そんなん…

恭子 このまま帰つたら、まだバレませんやろ、黙つて家に戻りなはれ。

兼 ……そうかて…

恭子 どつちやみち、あんさんは傷物だす。

兼 そんなん言われんでも分かつてます。

恭子 そんな、あんさんを慕うてくれてはるんやさかい、時間かけなはれ。

兼 嫁いでも、2人の意思が強かつたら、いつか一緒になれます。

勇吉 ……いつか。

兼 今が我慢のしどころです。世間に波風立てんでも、ほんまに想い

恭子 あつてたら、必ず一緒になれます。

兼 そのために、家の決めた人のとこに行けちゆうんですか。

恭子 一回はその覚悟がおましたんやろ？

兼 そら…

恭子 親の金に目くらましましたらあきませんで、こいさん。自分の想いは

兼 自分でなんとかせんと。また失敗しまっせ。

泣き出す恭子。勇吉がかばつてやる。

勇吉 すんまへん、すんまへん。こいさん。わてきつと待つてまっさかい

兼 に。金も力もあれへんけど、嬢さんと一緒にお待ちしてまっさかい。

恭子 辛抱しておくれやす。

恭子 嫌や…いや…

泣きじゃくる恭子。自分の羽織をかけてやる兼。

兼 急いで帰んなはれ。今やったら間に合います。もしも山城屋さんに
ばれたら、ここに来て前のことがあるのに結婚してもええもんか
相談してたって言うやらよろし、それ言われたらお父はんも
何も言いはれへんでしょう。

勇吉 お知恵まで授けてもろて、すんません。

兼 祝言が終わったら、時々、おいでやす。お稽古事や言うたら
出れますやろ。

恭子 お兼はん…

兼 ほんまもんの恋に当たったんが遅かったただけです。

踏ん張りなはれや。

恭子 へえ。

勇吉 さ、こいさん。

勇吉ととぼとぼ戻っていく恭子。しっかりと抱き合って歩いて行く。
何度も頭を下げて行く勇吉。

藤原 まいったな。大阪は誰でも自由に出世できる商人の町だと
思ってた。思ってた。

兼 不自由な町だす。言葉ひとつ、大阪弁とちゃうかったら除け者にす
るような、意地の悪いところおますしな。

藤原に山城屋から預かった包みの中を見せる兼

藤原 これは…お金じゃないですか。じゃあ、あなたは嘘を…

兼 嘘やおまへん。

藤原 は？

兼 お金で逃げた恋は、ほんまもんにならしまへん。

藤原 あ。

兼 かけおちの上に親の金盗んだら二重の罪人や。子供のためにも
二人で知恵使うて、苦勞して一緒になった方がええんです。

去っていった2人の方を見続けている兼。藤原が振り向かせる。

藤原 会ったびに、あなたは違う顔をしていますね。

兼 藤原さん、今夜はもうお引取り下さい。

藤原 え？

兼 ふふふ…なんや目が覚めました。

藤原 そうですね。今夜は水差された感じですね。

兼 いいえ、そうやのうて。年甲斐ものう、こんなことして…
どうかしてました。

藤原 お兼さん？

兼 神さんが。あんさん何してるんやちゆうて、横面張ってくれはった
んでしゃる。息子、浄瑠璃に押し込んで、時間読んで逢引やなんて
やっぱり柄やおませんわ。

藤原 こりや、はつきり言われたな。

兼 夢見そうでした。すみません。

藤原 見ればいいじゃないですか？

兼 (首を横に振る) ほんまもんの夢やないのは分かってます。

藤原 ……

兼 震災で大事な方を亡くしはったんでっしやる？あても寂しい時は
普通に女子の夢みたい日もおますけど。夢は夢だすわ。

藤原 お兼さん。

兼 おおきに。

藤原 …分かりました。こちらこそ、すみません。

兼 すんまへん。

藤原 ひとつ、お聞きしていいですか？あなたは人を好きになったことが
あるんですか？

兼 へえ。

藤原 そうですか、だったら良かった。

兼 懲りずにまた取材に来ておくれやす。

藤原 はい、参ります。失恋者として話を聞いてもらいに。

兼 いや…あほな事。

大人同士の優しい時間が流れる。笑いあう二人。

藤原が帰って行く。

残された兼。空を見上げる。

兼 綺麗なお月さんやなあ。

こいさん、我慢しなはれや。お月さんが見ててくれはるさかい。

踏ん張って、踏ん張って、恋の一念通しなはれ…

女子に出来るんはそれだけや。

独り月を見上げる兼。夜がとつぷりと暮れて行く。

第七場

静かな雨の日である。

妾話を頼みに来た島村と春日部が座敷に入ってくる。

春日部はウロウロして落ち着きがない。

島村　ちよつと座つたらどないや、ペーヤン。

春日部　何時や？

島村　さつきから何回聞いているんや。(時計を見る)　1時半や。

あと30分ほどで来はるで。

春日部　ほんまに上手いこと行くんやろか。

島村　それも朝から何回聞いているんや、大丈夫やて。こういうことは

お兼はんの言うとおりに、大げさにした方が真実味があるて。

春日部　それにしても、そのわしの妾になるつちゆう女子はいつ

現れるねん？

島村　そういうたら遅いな。見合いやあるまいし、相手の顔知らんまま

親父さんに合わせられへんで。

春日部　大丈夫かいな、ほんまに。

そこに着物姿に前掛けをした清が現れる。

清　旦那さん、もうすぐでつせ。

島村　おお、清ちゃんか。よう似合つがな。

清　お仕着せが？褒められた気になりませんわ。旦那さん、もうすぐでつせ。

島村　ペーヤン、あんたのこつちやがな。

春日部　わし？ああ、そうか。この子がうちの丁稚の役かいな。

清　へえ、清吉言つておくれやす。

島村　上手い、上手い。いつでも行けるな。うちに来るか？

清　お願いします。

春日部　もう、何をのん気に言つてるねん二人とも。ほんで、わしはどこに座つたらええんや？

島村　こない本番に弱いと思えへんかったなあ。ちよつと引つ掛けるか？

(お酒を飲むしぐさをする)

春日部　何を言つてるねん。…酒か…うん、飲む。

島村　飲むんかいな。清ちゃん、悪いけど冷酒お湯飲みに半分くらい

入れて来たつてくれへんか。

清　ああ、女衆さんにしてもらいますわ。今日は二人もおるさかい。

島村　ああ、そうか。女中の役のおぼはんらな。

清 (台所に向って) メさん、メさーん。

メが入ってくる。いつもとたいして変わった感じではないが、前掛けをしてい

メ >え、お呼びでござりますか？

清 わ。えらい丁寧な。

メ 今日は上女中の役やさかいな。なんやのん忙しいのに。

清 旦那さんがお酒召し上がりたいて。

メ お酒？もう父子はん来はるちゅうのに？

島村 気つけや、頼むわ。

メ >え、畏まりました。ほんで、そろそろお手掛けさんのお顔を

見ときはりまっか？

春日部 ああ、そら見とくで。見とかんと。

島村 なんや、用意出来てるんかいな。連れてきて、連れてきて。別嬪か？

メ >え。そらもう。

メが台所へ引つ込んでいく。

島村 お兼はんの人脈はすごいなあ。若い、大人しい、別嬪さん見繕い

まっさ、言うてたさかいな。>>へ。

春日部 雄さん、あんたさつきから、ちよつと楽しみ過ぎちやうか？

島村 そら、楽しまんどどないするねんな。人の金でこ趣向してるような

もんやねんから、座敷でもこない面白いことないで。

春日部 よう言わんわ。

メがお酒を持って入ってくる。そこに玄関先から「お邪魔さん」と声が聞こえ

る。清が「へい」と稚らしい返事をして対応に出る。慌てる一同。

島村 来たんか？早いな。

春日部 うちの親父、イラチやねん。

島村 そういうことは早う言いな。

メ どないします？かけつけにいきまっか？

春日部 ああ、おくれ。

メから酒を受け取って一気に飲む春日部

春日部 旨いな。

メ 剣菱だす。いま仰山おますねん。

清が春日部の父親を案内してくる。

清　こちらでおます。

春日部　あかんがな。妾の顔見てへんで。

島村　あほ、もう遅い。

障子が開くと、しかめ面な初老の男が仁王立ちしている。

清　旦那さん、お越しになりました。

春日部　あ、うん。うん。そうか。お父はん、早いがな。

父　人待たせん主義や。知ってるやろ。

春日部　そらそうやけど。

父　(島村を見て)　こちらさんは？

島村　どうも、こんにちわ。堺筋で呉服屋と蒲団屋やってます

島村　ちゆいます。今日はえらい遠いところから、足元悪いのに

ご苦労さんでおます。

父　そうでつか、息子がえらいお世話になってまん。

島村　いいえ、ただの寄り合い仲間だす。今日は付き添いに來させて

もらいましたんや。佐田屋さんがこういうご挨拶の決まりを

あんまり知らんちゆいはるんで。

父　なんでも仕来りのある船場のこつちや。新参者のことやさかい

万事宜しゅう頼みます。

島村　へえ、任しといておこなはれ。うちは代々済ませてきたこと

でっさかいな。

父　そら、お盛んなことで。

島村　商売と一緒ですわ。女子もある程度手広うしとかんと。

父　甲斐性の信用にかかわりまっさかいな。

島村　わしもそう言うたんです。ほな、これが女子のひとりやふたり

面倒見てますちゆうさかい、嬉しいなつてなあ。

父　佐田屋さんは、船場に進出しはって大成した話題のお方だす。

島村　女子がほつときますさかいな。

父　そうでつか。ははは。

春日部　あは。あはは。

父　まあ、仕来り言うてもたいしたことおまへん。女子の顔見て

島村　挨拶受けるだけだす。そやけどひとつだけ。

父　なんでおます？

島村　長居せんことだけ、お約束願います。いくら仕来りちゆうても

父　息子の妾の家で長居するんは無粋でっさかいな。

父　なるほど、さすがに粋なことぞん。

島村

いやいや、たぶん昔に長居する人が居ったんでっしやる。それで仕来りやちゆうことにしたんどちやいますか。

中には田舎者の親戚が宴会したりして、品のないことしたんちやいますか。

父

な、なるほど。

島村

なんでももつちやりしたんは嫌われまっさかいな。

春日部

ま、うちの親父は奈良で大きい商売してるさかい、

そのへんは大丈夫や。なあ、お父はん。

父

当たり前やがな。

今のところ上機嫌の父親である。しかし春日部は肝心の妾役の女を

見ていないので気が気ではない様子。

そこにメがお茶を運んでくる。

メ

失礼致します。旦那さん。お茶でございます。

春日部

あ、うん…

メがお茶を出して、廊下に下がると一礼して。

メ

お美喜はんが、お控えでござりますけど。

春日部

お美喜？ああ、お美喜な。

島村

ほな来てもろて。

メ

へえ。

春日部

(父に) 美喜ちゆう名前なんや。おが付いたら誰か分かれへんようになるねん。お神酒のことかと思うた。あははは。

父

神さんのお酒を笑いもんにしたらいかんがな。

春日部

あ、すんません。

メが先導して障子を開ける。

メ

失礼いたします。お美喜はんお連れしました。

障子がさらに開くと、百花が地味な着物姿で座っている。

父

おお。

美人が現れたので嬉しそうな春日部と島村。

メ

この度はようお越しくださいました。上女中のトキでございます。

百花

下女中の留でございます。

春日部 下女中？

父 なんや、自分とこの女中知らんのんかいな？

春日部 いや…あの。いつも下なんか付いてへんさかいに。

島村 そらそうや、普段呼ぶ時にいちいち下女中の留とか言わへんさかいな。ははは。

春日部 そらなあ。うん。

父 女中とは思えん器量やな。

島村 そうでっしやろ、佐田屋さんは趣味がええさかい。

みんなが愛想笑いしているところに、廊下の奥からユキがいつもと違って化粧をして、赤い着物を着て入ってくる。どうみても大福に着飾った感じ。

島村 ん？

春日部 ！

ユキ どうも、且さんのお父様でございますか。美喜と申します。

且さんには手厚うお世話になっております。

全員がしばらく黙ったままである。が、堪えきれずに噴出す島村。

島村 プウツ！ あはははははは

父 島村屋さん？

島村 すんまへん…（笑いをこらえて）これも仕来りのひとつでおます。親父さまも一緒に笑うて下さい。邪気払いですねん。

と言いつて、またユキの顔を見ると自然に大笑いする。

島村 あはははは。

春日部の父親は仕来りかと思ひ込み、一緒になって笑い始める。

そうなるに春日部も止まらない。3人が立ち上がって涙を流しながら大笑いする。

島村 鬼は外つ。あはははは

父 鬼は外つ。

島村 あはははは

春日部 あははは

そ知らぬ顔で座っている々と百花。ユキは珍しそうにその姿を笑って見ている。その顔がまた愛嬌があるので、男たちはしばらく笑いが止まらない。

やがて、涙を流しながら島村がようやく笑い治まって、座って話し始める。

島村 いやあ、疲れまっしやろ。
父 奇妙な仕来りでんな。

島村 くくく…そうでんねん。まああれです、無病息災、子孫繁栄の儀式
みたいなもんでっしやろな。ひひひ…

父 ははは。どこやったかの田舎にもおますで、こういう厄払い。
へえ、そうでっか。あははは。

島村 笑い過ぎや。

春日部 そうかて…わしは付き添いやからな…ははは…

島村 ま、そういうこつちや。お父はん、顔見たら安心したやろ。

春日部 うん。(ユキに向つて) 美喜さん。

父 へ、へえ？

ユキ 倅の子をな。早いこと産んだつてや。

父 (きよとんとしているが、父が合図する) へえ。おおきに。

父 お美喜さんのお蔭様をもちまして、旦那さんからは私らにまづ

毎月のお手当をいただいています。おおきにありがとうございます(わります。

百花香 ありがとうございます。

父 (父に合図されて) これからも末長う宜しゅうお願いいたします。

島村 うん。うん。

父 粗相ないご挨拶やった。下がつてええで。ははは…

父 それでは。

百花香 失礼いたしました。

障子が閉められ、男たちが残る。島村はまだ笑っている。

島村 いやあ、一本捕られたな。

春日部 ほんまや。

父 幸次郎、ええ子やないか。

春日部 へ？

父 愛嬌のある、体の丈夫そうな。さすがにわしの息子や。ああいう子
が一番ええ。よう見つけた。うん、ようやった。

島村 …さすがやなあ、佐田屋はん。親父様は目のつけどことがちやうわ。

春日部 おい、雄さん。

島村 いや、ほんまですわ。女子は顔やおまへん。美人は3日で飽きるが、

醜女は3日で慣れるちゆうてな。

父 ええ格言だんな。

島村 へえ、これも船場の言い伝えます。

春日部 ええ加減なこと。

島村 ほんまやがな。商売に白粉は叩かれへん。言うて別嬪過ぎる嫁はん

は 嫌われるねんで。化粧や、衣裳や言うて金かかるやろ。
嫁はんの高い白粉代払うより、身になるもん買った方が賢い
ちゆうて、うちの爺ちゃんもよう言うとった。

春日部

ふーん。

父

いや、その通りや。さすがに代々お店張ってきはった方は
しつかりしてまんな。

島村

そない言われたら、尻がこそぼおますけどな。

父

ははは、まあこれからも息子を指導下としますよう、
宜しゅうお頼申します。

島村

こつちやこそ、今後とも宜しゅうに。

春日部

ほな、お父はん。ここではなんやさかい、ミナミの店言うて
あるさかい行きまひよか。

父

なんや、そんな勿体ない。

島村

宜しいがな。せっかく奈良から出てきはったんやさかい、
久しぶりに親子で飲むんも。儲けてはるんやし、

親孝行な息子さんでんなあ。

父

そうでつか…そら嬉しいこつちや。
行きまひよか。

島村

清吉。

清

へーい。

島村

旦さんと、親父様がミナミ行きはるて。角で車屋捕まえておいで。

清

へーい。
何から何まですんまへんなあ。

父

いや、今日は世話役でっから。ほな佐田屋さん、

島村

後の事は安生しとくさかい。

父

あんさんは残りますんか？この妾の家やのに？
いや…それは…この人にご祝儀預かってますんや。

島村

女中やらに渡してやらんと。な？

春日部

すまんな。頼んだで。

島村

ああ、任しとき。

父

船場のお方は行き届いてまんなあ。

島村

おおきに。

父は大納得で帰って行く。玄関先でべと百花の見送りの声がする。
ひとり座敷に残った島村。改めて大きな声で笑い出す。
兼がユキを連れて入ってくる。それを見てまた一段と笑い出す島村
べと百花も笑いながら入ってくる。

島村

あははは…ああ、面白かった。

兼

上手いこと行きましたな。

島村 笑うてしもうた時はどないしようかと思つたで。
兼 上手いこと誤魔化しはりましたがな。

島村 あれの親父どん、これが船場の仕来りやと思ひ込んで帰るんやな。
兼 しかし、あんた天才やな。まさか、この子が…あははは…

ユキ わて、天才でつか？

兼 あほ、あんたのこととちやうがな。

島村 いやあ、一本も二本も獲られたわ。

兼 田舎のお方やて聞いてましたさかい、この子が一番ええと思つて。
島村 今から思つたら、ほんまやなあ。

兼 ほんで、この別嬪さん雇つたんです。不細工が引き立ちまっしやろ。

百花 いや、お姉さん。可哀相なこと。ユキちゃん可愛らしいや
ないですか。

ユキ わて不細工でっせ。

島村 ほんで、この下女中どんはどつから沸いて出たんや？

百花 こんにちは。

兼 駿河屋さんにお世話になりはる、お方です。

島村 へえ。駿河屋はんの？何番目や

百花 さあ、4、5番目ちやいますやろか。

島村 止めとき、止めとき。あんなジジイ。わしが世話したるで。

百花 いや、ほんまだつか？

兼 ここで、ややこしい事にならんといっておくれやす。

島村 あてが駿河屋はん顔立ちまへんがな。

兼 怒られた。

島村 且さん、預かつてはるもん(手を出す)

兼 ああ、そうや。肝心肝心。へい、今日の仕込みのお礼です。

兼 おおきに。また頼むで。

兼 そない何べんも出来まっかいな。

兼 そう言いながら封筒の中身を見る兼。

兼 いや、こんなにおおきに。さすがに繁盛してはりますなあ。

島村 佐田屋はアイス最中で大儲けや。溶けん間に納めてや。

百花 上手いこと言いはる。

島村 こんなことばっかり言つて暮らしてるとさかいな。

ユキ どういう意味でつか？

島村 あはは…あかん、子のこの顔見たら自動的に笑うてしまつわ。

兼 皆が笑っている間に、兼がお金をさつさと懐紙に包む。

兼 さあ、お師匠はん、百花はん。今日のお礼です。

忘れんうちに渡してきますよ。

おおきに。

いや、うちにもっすんません、お姉さん。

ほんで、うちの分。さ、ユキちゃん。あとは全部あなたのもんやで。

〜？

あなたの家が吉野屋さんに借金してるさかい奉公に上がらな

あかんかってんやろ。それだけあったら払うて田舎に帰れるがな。

お兼はん…(封筒の中身を見る)わて、こんなん頂けません。

何言うてるの、あなたが居らんと今日の仕込み出来へんかってん

さかい、働いた分ちゃんと貰うもんや。

おおきに…わて…お母ちゃんどこに帰って宜しいんか？

そう言うこつちや。

おおきに…おおきにい(泣き出す)

不細工やなあ。

みんな泣き笑い。

兼 お師匠はん、この足でこの子口入屋まで連れて行って、事情言うて

きてやつてもらえませんか。大金持たせとくのん怖いさかい。

ああ、よっしゃ、よっしゃ。

あても一緒に行つたげるわ。

ええ。あなたも？

へえ、口入屋ちゅうとこ見たことないで、行ってみたいんです。

勝手にしなはれ。さあ、行くで。別嬪さん。

ユキ

へえ。

〜と百花に連れられて、何度もお辞儀をしながら口入屋に向うユキ。
泣き顔でむちやくちやになつてゐる。

島村 あない泣いても可笑しいて、才能やな。

兼 島村屋はん。今日はおおきにでした。

島村 こつちやくそやがな。わしも、ペーやんに紹介した甲斐があつた。

おかげさんで株があがるわ。

そんなこと。

しかし、あなた相変わらずええ女子やなあ。どや？

お断りします。

兼 島村 まだ何も言うてへんがな。

兼 島村 旦那さんの言うこと決まつてまっさかいな。

島村 また、一本捕られた。今日は二本目や。

そこに渋い顔つきのしづ方が庭先から入ってくる。

しづ方 ごめん。

兼 いや。山田屋はん。

しづ方 お兼はん、あんたようも騙してくれたな。

兼 なんだす、急に？

島村 なんや、しづ方やないか。

しづ方 島村屋はん。なんでここに？

島村 なんでもええがな。

しづ方 ちようどええ、証人になつておくれやす。

島村 なんやて？

しづ方 お兼はん、あんたやつてくれたな。

兼 なんでっしやる。

しづ方 しらばっくれなはん。この間の話や。

兼 え？

しづ方 あんたやろ、商工会議所に届け出したん。岩井商店の跡取りを清に

するて報告が来てましたで。この間そんなつもりはないちゆうた

舌の根も乾かんうちに、よう手のひら返すようなこととして

くれましたな。

兼 なんですて？そんなあほな。

しづ方 わしは岩井商店から暖簾分けしてもらた筆頭だつせ。

兼 そのわてに嘘までついて、自分の息子を跡取りにしたいんかいな。

しづ方 ちよつと待つておくれやす。あてはそんな届けだしてまへん。

兼 何を今さら。

しづ方 ほんまだす。何かの間違いやおませんか？

兼 間違いようがあるかいな。今日、商工会議所行つたら、

その話題で持ちきりや。皆さんわしが知らんかったんかちゆうて

半笑いやつた。身代のことやのにつまはじきにされてる思われた

んでっしやる。よう恥かかしてくれましたな。

兼 山田屋はん。ほんまに、あてと違います。

しづ方 あんたやのうて誰が出しますんや？岩井に後見人が居らんのか

ええことに、店乗っ取る気いだっしやる。

島村 しづ方、女子に向うて言い過ぎや。

しづ方 言い過ぎも何もおまつかいな。だいたいこの女子、知恵の立つんで

有名なんや。目の悪い若旦那の代わりに自分の息子を跡取りに

することくらゐ考えてもおかしいおまへんで。

兼 そんなこと…

しづ方 日ごろ腹で儲かる算段ばかりしてる人間が、思わんわけないがな。

島村 ええ加減にせえ。大きい声でいやらしい。

しづ方 いやらしいのはどつちだす？

その時、二階に居た喜一が階段から足を滑らせて落ちてくる。
驚く大人たち。

兼 きーぼん、大丈夫だったか？

喜一 大丈夫や。いたた…足くねったかいな…

しづ万 ぼんぼん。まだ、ここに居りはったんでっか。

島村 なんや、きーぼん上に居ったんかいな。

喜一 誰です？

島村 あ…島村や。堺筋の。

喜一 ああ、島村のお兄さん。お久しぶりです。その節は、お父ちゃんの葬式でお世話になりました。

島村 居ったんやったら、今日はやかましいことで、すまんかったな。

喜一 いいえ、楽しそうな声聞いて、こっちも面白かったです。

しづ万 ぼんぼん。

喜一 万次郎。あの届出出したん僕や。

しづ万 なんですか？

喜一 ネエちゃんに相談したら、反対するのん分かってたさかい、

しづ万 僕が出したんや。

しづ万 なんでそんなこと。

喜一 なんてで…見たら分かるやろ。僕はもう階段もひとりで下りられ

へんねんで。商売なんか出来るかいな。

しづ万 そら…そうでっけど。

島村 ま、ちよつと座りいな。足痛いやろ。お兼はん、なんぞ冷やすもん。

兼 へえ。(台所に走っていく)

喜一 おおきに。

島村が手伝つてくれて、縁側に座る喜一。さすがに大人しくなったしづ万。

島村 跡取りのことかいな。

喜一 はい。お兄さんも知ってはるでしょ、7年ほど前から僕の目が

あかんようになってきたん。

島村 ああ、亡くなった先代が心配してはった。

喜一 医者の原因が分かれへんの一点張りや、たいした治療もできへんまま、段々悪うなつてしもて。それでもこの間までは天気のエえ日はまだぼんやり見えてたんですけど、一週間くらい前に急に悪うなりましたん。ほんまに目の前真っ暗になるちゆうやつですわ。

島村 そら、大変やっただな。

喜一 ほんで、気がおかしいなりそうになつて、ここへ来たんです。

しづ万 ぼんぼん、そない…

喜一 そら、僕かて覚悟はしてたけど。やっぱり怖いがな。

医者はまだ望みはあるちゆうさかい、ちよつとは治るもんかと
思ってたしな。

しづ万 そらやっただんでつか…

島村 気の毒になあ。どないもならんのかいな。

喜一 まだ治療もするつもりですから、どないかなるかもしれせんけど
…ここに来て、よくよく店のこと考えたんです。

しづ万 え？

兼が手ぬぐいを持って廊下に佇んでいる。入るには入れない様子。

喜一 お店ちゆうんは戦国時代でいうたら城と同じや。その城主が何年も

目患つて、ろくに跡継ぎの修行もしてへんままでは、この先が思い
やられます。昔やったら、攻め込まれて首捕られるが落ちや。

しづ万 なに言うてはるんだす。わてらが付いてますがな。

喜一 そや、あんたらが居つてくれるから、今はなんとか成り立って
るんや。そやけど、このままでは立ち行かん。

僕の事は家督を譲つて、店の方向を決めることや。

しづ万 そらそうでおますけど…

島村 若いのによい言いはなつた。

喜一 うちの後見人が居れへんさかい、僕が決めるしかありません。

しづ万 ほんほん。そやさかい後見人はわてがさせてもらいます

ちゆうたやないですか。

島村 そらあかんわ。後見人は第三者でないと。おまはんは身内同然や
ないか。

喜一 そうなんです。万次郎になつてもらえたら一番ええんですけど、
お父ちゃんも死ぬまでそれはあかんって言うてはつたんで。

そうやっただんか。

島村 うちはお父ちゃんも一人っ子で、親戚もおりませんしね。

喜一 そうかいな。そんなんやったら早う言うてくれたら良かったのに。

わしがなつたら。

喜一 え、ほんまですか？

しづ万 島村屋はん。

喜一 そら嬉しいなあ。お兄さんとは老舗中の老舗やし、安心して
お願いできますわ。なあ万次郎？

しづ万 そら…はい。

島村 よっしゃ、よっしゃ。心配せんでもええ。あんたの気持ちは
よう分かった。若いのにええ覚悟や。なあしづ万。

しづ万 む。

喜一 万次郎、そない洩りな。あんたが妾の子風情に身代譲るんが

面白くないと思ってるんも分かってるけど、清ぼんは僕にとっては
たったひとりの弟や。お父ちゃんかて本籍にちゃんと入れてはる。
それは分かってます。

喜一 あんたがネエちゃんのこと嫌いなんも知ってる。
しづ万 え？

喜一 知恵で叶えへんから、腹立つんやろ？

しづ万 あほな…そんなことおません。わてはただ、ものには
順序ちゆうのがあると思ってるんだだけでおます。

お兼はんはこの間…

喜一 そやから届けを出したんは僕やつて言うたやないか。

ネエちゃんは何も知らんこつちや。あんたがそんなとこで

嫉妬するから相談せんかったんや。

しづ万 嫉妬？

喜一 嫉妬やないか？ネエちゃんの才覚にムカつくんやろ。

自分が船場一賢い始末屋やと思つてたのに、女子にやられて
嫌なんちやうんか？

しづ万 そんなことおまへん！

島村 ははは…目明きよりよう物見えたあるな、きーぼん。

喜一 お兄さん、店の跡取りの件、ほんまにお任せしてよろしいですか？

島村 ああ、かまへんで。

喜一 清ぼんはネエちゃんの息子やさかい、賢い子です。自分では商売に
向いてへんちゆうけど、そんな人間が一番向いてます。

ご指導のほど宜しゅうお願いします。

島村 ああ、分かった。しづ万もそれでええな？

しづ万 へえ…

兼がやっとなってくる。

兼 すんまへん。手ぬぐいの綺麗なんが見つからんで。

喜一の足を冷やしてやる。

喜一 ネエちゃん、今の話聞いてたんやろ？これからのことは僕と、

兼 島村屋さんに任せて。ええやろ？

島村 ……

お兼はん。清ちゃんのことほ心配せんでもええ、立派な次男坊や
ねんさかい。ちゃんとしたげるよつてに、そのための仕来りや。

兼 へえ…すんまへん。おおきに…

喜一 万次郎、これからは清ぼんのこと、頼んだで。

しづ万 へえ。

喜一 ネエちゃんはあるの思うてるような女子と違う。心底綺麗な人や、
よう覚えときや。

しづ万 すんまへんでした。

「玄関から清の声が聞こえてくる。」

清 ただいま戻りましたあ。

喜一 ああ、未来の六代目はんのお帰りや。

島村 さっきまで丁稚やったのに、六代目か、こら応援しがいあるな。
わし音羽屋好きやねん。

しづ万 なんでおます？

島村 秋やし、襲名披露は菊づくしやな。

喜一 粹なあ、お兄さん。

島村 ははは…

兼 きーぼん。おおきに…おおきに。

兼が顔を覆って泣き出す。

島村が背中を擦ってやる。しづ万は堅い表情で座ったまま。

しめやかに雨が降っている中、兼の声だけが響いている。

紋付姿の清が家の中から登場し、一礼して出て行く姿がある。

ややあつて、兼が登場し、大きな風呂敷包みから着物を出して広げだす。色鮮やかな何十枚もの着物である。庭先に藤原が現れる。

藤原 やあ、綺麗ですね。

兼 藤原さん。

藤原 今日は、お別れにきました。

兼 どこぞ行きはるんですか？

藤原 しばらく東京に戻ります。

兼 そうですか、寂しいなりますね。

藤原 そう言ってもらえると嘘でも嬉しいなあ。

兼 嘘やおまへんで。

手を止めないで着物を広げていく兼。

藤原 まさに絹の海だな。

兼 また文学的な言い回しやこと。今から虫干しですわ。

藤原 全部あなたの着物ですか？

兼 まさか、預かってますねん。

藤原 全部ですか？高価なものでしょう？

兼 船場ちゆうところは、アホみたいな仕来りが多いんです。

月初めと15日には新しい着物のシツケとって着なあかんとか、

暑うても寒うても、日が着たら衣替えせなあきませんしな。

お正月になったら必ず新しい晴れ着作らんと恥かきますんや。

しかも二回と袖通されへんもありませんねん。

へえ、勿体無い話だな。

藤原 そやさかい、内緒で着回すんです。幾らなんでも物入りでつさかい

な。

藤原 なるほど、ほとぼりが冷めるまで寝かせてあるわけですね。

兼 好きな色や柄が決まったら、何年か経ったら分かりませんし。

藤原 ははは…上手く使いまわすのが始末ですか。

兼 ふふふ。

藤原 今日はなんだか嬉しそうですね。

兼 そうですか？…そうかもしれません。

藤原 何かいいことでもあったんですか？

兼 へえ。

藤原 どうしたんです？

兼 知り合いの女子はんに幸せなことがあったんです。

藤原 そりゃ良かったですね。

兼 あの人、昔昔心底好いたお方が居ったんです。

藤原 へえ。

兼 その人の子を、お世話になってる旦那さんの子やいうて育ててはったんですけど。

藤原 船場のそう言う話にやっとなれてきましたよ。

兼 その、お子さんが結婚でもなさったんですか？

藤原 いいえ、船場のご大家に入って跡取りさんになりはったんです。

兼 ほう。そりゃ凄いです。

藤原 長いこと、辛抱してはりましたさかいなあ。

また着物を広げて。衣桁に掛ける兼。

藤原 置き換えがびたつと嵌ったってことですか？

兼 え？

藤原 友達にそういうことがあったから喜んでらっしゃるんですよ。

兼 そのとおりです。よう覚えてはりまんなあ。

藤原 あ、汽車の時間だ…じゃあ、これで。

兼 あ、すんまへん。何のお構いもしませんで。

美しい着物の中で立ち振る舞う兼の姿を怪訝そうに見つめているが、やがて去っていく藤原。

百花が手伝いに来ていたらしく、着物を持って入ってくる。

百花 いやあ、お姉さん。それよう似合いはるわ。

兼 そやろか？

百花 岩井商店のお家さんになりはるねんから、これからはサラ着なあきませんで。

兼 アホなこと。お下がりで十分や。

百花 まだ始末しまっか？

兼 勿体無いがな。誰も気いつけへんかったら、誰も損せんと、みんな仕合せにやっついていけるねんから。

百花 へえへえ。

百花が別の着物を当ててやる。

新しい着物を羽織った兼は、嬉しそうに自分の姿を見ている。

終劇。

登場人物

●芳崎兼・・・・・・・・・・みやなおこ

●岩井清・・・・・・・・・・江戸川萬時

●岩井喜一・・・・・・・・・・うえたひろし

●藤原京太郎・・・・・・・・有馬自由

●山田万次郎・・・・・・・・浅野彰一

●島村雄之助・・・・・・・・鈴木健介

●春日部幸次郎・・・・・・・・森崎正弘

●春日部太郎・・・・・・・・野田晋市

●百花・・・・・・・・山本香織

●篠山半兵衛・・・・・・・・コング桑田

●篠山恭子・・・・・・・・内山絢貴

●勇吉・・・・・・・・長橋遼也

●ユキ・・・・・・・・谷川未佳

●ソ・・・・・・・・わかぎさゆ

●九衛門・・・・・・・・茂山宗彦&逸平

(東京公演↓野田晋市)